

本部の戦争体験

本部町崎本部 仲 地 文 子（十七歳）

私は一九四三年（昭和十八年）に学校を卒業しました。女学校に行きたかったけれど、すでに母は亡くなっていたし、病弱の父をかかえていたので進学どころではなかつた。

人々の生活は戦時色で塗りつぶされ、村の婦人たちも毎月一日には約二キロも離れた部間権現へ出掛けだし、また十五日には村の拝所で遠い戦地にいる夫や息子たちの無事を祈つていた。

その頃私たち青年は、学校を出ると同時に青年学校に通わなくてはならなかつた。そこに青年学校担当の教師が数人いて、授業は週に二度ずつ、正午過ぎから四時間ぐらい行なわれた。授業内容は、時局に関することと青年の心構えや作法などが中心をなしていた。だが、戦争が切迫してきたのでいつしか青年学校もなくなり、私たちは連日徴用に駆り立てられることとなつた。

まず最初は伊江島へ行くようという命令であつたが、父の看病を理由に一応それは断つた。するとある日、青年学校が私のような者を数人あつめて、「君たちは國賊か。みんなで頑張つているといふのにいつまで家庭に引っ込んでるつもりだ」ときつく叱られてしまつた。それで悔しさのあまり徴用に応する決意をして、当時真部山にいた宇土部隊へ行くことになつた。そこには約一〇日間いたが、作業内容は殆んどモッコ掘りと草刈りであった。兵隊が壕を掘

ると私たちがその土を運搬したのである。
だが、ちょうどその頃、陸上部隊という船舶隊が崎本部の学校に駐屯することになったので、私たちはこんどはその部隊の作業に出ることとなつた。村の近くで壕を掘つたこともあつたが、安和の山の麓で兵舎にのせる茅を刈りたこともあつた。このようにして、何日も何日も弁当持参で通つたものである。

忘れぬ空襲の日の記憶

一九四五五年（昭和三十年）三月二十二日の空襲について私には忘れない悲しい記憶がある。その日はたまたま、当時女子師範に行つた友人が帰省していて、終日二人で語り過ぎすはすであった。だが突然空襲は、私たちのそのささやかな期待をぶち壊し、恐怖の底に陥れた。

米軍機は海の彼方から低空で飛んで来て、丘の上にある学校付近を攻撃し始めた。ものすごい爆音をたてて頭上を旋回している米軍機を見上げながら、私たちは壕の中でたゞブルブル震えていた。その恐怖の中で彼女は、「十・十空襲のあと、学校に戻つて来るのが遅かつたために、みんなの面前で先生方に國賊呼ばわりされた友人たちがいたので、私も明日は那覇に帰らなくてはならない」と心配そうに話していたが、その翌日急いで那覇に帰つて行った彼女は、あれつきり二度と帰らぬ人となってしまった。

その日の空襲があつてから、人々は急いで避難を始めた。私たちがいたので、私も明日は那覇に帰らなくてはならない」と心配そうに話していたが、その翌日急いで那覇に帰つて行った彼女は、あれつきり二度と帰らぬ人となってしまった。

月上旬のことであつたが、その艦砲射撃で数人の村人がやられた。老人も少年も結婚したばかりの青年も、ほんの一瞬の間に死んでしまつた。

食糧を求めて

それからは来る日も来る日も猛攻撃が続いた。やがて米軍上陸の噂も広まり、人々は恐怖に怯えていた。だが、危険をおかして暗い夜道を食糧を求めて歩き廻らなくてはならなかつた。

そんなある日、十二歳の腕白な少年が村の近くのハニクの浜から罐詰の箱を狙いで来たことがあつた。それを見て驚いた大人たちは、その少年に疑惑の眼を向け、きっとスパイにちがいないと怒り出す人々もいた。米軍が上陸して来たのはその翌日のことであつた。すると人々は、その少年に対する疑惑をいつそう深め、「なぜアメリカーたちを連れて來たのだ」と詰め寄るなど、一時は陥落した。すると人々は、その少年に対する疑惑をいつそう深め、「なぜ空気につつまれたものであった。それから人々は、もうそんな危険な場所にはおれない」ということで、みんな立ちぢりになつてしまつた。私たちもすぐに移動を始め、ウバサマタを経て八重岳の麓まで逃げ廻つた。だが、八重岳周辺も艦砲や銃弾が激しく飛び交つて、かえつて危険だと思われたので、再びウッカーに引き返すことになつた。

占領軍の蛮行

六月になると、食糧を探しに村へ下りたまま米軍に捕まつてしまふ者も多くなつた。避難小屋の付近にも米兵が出没するようになつたので、避難民の間でもいつまでも山の中に隠れているとかえつて危険だから、そろそろ下山しようではないか、という声が強くなつてゐた。そんなある日私たちは、おりしも山に登つて來た米兵らに包囲され、付近一帯の避難民とともに捕虜となつてしまつた。そして村からトラックに乗せられ、羽地の収容所に連行された。

それから数か月間、私たちは伊差川にいたが、米などの配給がいくらかあったとはいえ、それだけでは全然足りなかつた。それで人々は、各自の村へ食糧を取りに通わなくてはならなかつた。私もまた、村の男たちについて約二五キロの道を往復することとなつた。当時崎本部には焼け残つた家が数軒あつた。村に着いて一軒の大きな家に入ると、そこに老婆が一人でとり残されていて、さも苦し

そうに呻いていた。水を飲ませてくれということだったので、一緒に来た男の人がその老婆を引き起こして水を飲ませてあげた。すると突然、はるか下の方から指笛の音にまじってヤンキー特有の喧噪が伝わってきた。一緒にいた男は私に対して「気をつけるんだよ。アメリカーたちは女を探しているんだから、見つかったら大変だぞ」と教えてくれた。そして老婆をそこへ寝かせて、私たちは急いでその家の裏から逃げた。そして夕方まで焼け残った家の隅っこに身をひそめていて、あたりが暗くなつてからようやく村を脱出した。その日は、どういうわけか一日中、米兵が指笛を鳴らしながら村の中を歩きまわっていた。いわゆる強姦事件が発生したのは、その晩のことである。

その晩、村に残っていた人々のところへ突然米兵が乱入し、男女とも車座にすわらせてその中から女性を一人ずつ引っ張り出でて乱暴をしたとのことであった。その晩は羽地でもたちまちのうちに広がつたが、婦人たちは事件の顛末について涙を浮かべながら語り合つていたものである。

荒ればてた村に帰つて

羽地でも、真喜屋あたりへ食糧を探しに行く途中で、米兵に襲われた女性が何人かいた。だから、米兵の目をごまかすために、女たちはわざと顔に鍋墨を塗り、薄汚いなりをして歩いたものだった。また、深夜に突然米兵が現われると、空罐やバケツなどをガンガン叩いて追払つたものである。

私は伊差川では衛生班に属していて、便所の検査について歩いた伊江島では、二人一組でモッコを担ぎ、飛行場へ土を運んだりした。そんな仕事が数日間続いたあと、洞穴の中に連れて行かれた。そこでは兵隊たちがあちこちにランプをつけて壕を掘っていた。私たちもそこから土を運び出す仕事についたのであった。時には兵隊たちと一緒にトロッコを押したり、モッコで土を運んだりしたものである。

徴用の期間はまともな家に住むこともできず、私たちは空墓に宿泊させられていた。あの墓もこの墓も徴用で来た人々でいっぱいしていたが、なかにはまだ閉ざされたままの墓もいくつかあつたので、非常に氣味が悪かった。また墓の中は空氣も悪くて、とてもじつとしておれなかつたので、私たちは深夜まで浜辺などで語り過ごすのがつねであったが、おかげで翌朝は起きるのがとても辛かつた。

食事はもはやまともな辛さらなく、殆んど麦飯ばかりであった。そのため多くの者が下痢で苦しんでいた。汗と土にまみれて帰つても風呂もなかつたので、作業が終ると海へ行って汗をふいたものであつた。南国とはいえ、真冬の海はさすがに冷たく、とても体ごと潮に入ることはできなかつた。水も不足がちだったので顔もろくに洗えなかつたし、いつも素足で作業をしていたものである。

旧暦の大晦日には、私たちも旧正のために村へ帰つてもいいということになつていて。ところがちょうどその日に猛烈な空襲に見舞われてしまつた。兵隊も民間人もたくさん傷ついたし、死者も何人か出た。私たちは予定どおり村へ帰ることもできず、オニギリを一個ずつ与えられて、とうとうその晩も墓の中で過ごさなくてはなら

り、事務の手伝いなどをしていた。配給だけではとても食べていけなかつたので、田んぼから草を採つて来て食べたり、口べらしのたために作業に出たりしていた。

羽地から崎本部に帰つて来たのはたしか十月の初旬頃で、朝夕はだいぶ、肌寒くなつていて。家は殆んど焼かれてしまつていて、田畠も戦車や軍靴で荒らされていたので、しばらくは学校にテントを張つて集団で過ごさなくてはならなかつたし、煙を耕すことも容易ではなかつた。その頃、おりあしく悪性のマラリアが流行して、そのためにまた何人かの人々が亡くなつてしまつた。あれほどの戦争を生き延びて来たというのに、体力が衰弱していく病魔に抗しきれず、バタバタ倒れて行つたのであった。悪性マラリアは高熱が何日間も続き、熱がなかなか下がらなかつた。殆んどの人々がそのために苦しんだが、老人や幼児だけではなく若い女性もなくなつたし、私の父もついにその悪性マラリアにやられて死んでしまつた。

徴用の勤労奉仕

本部町崎本部 勇川 幸子（十六歳）

私は学校を卒業しても家事の手伝いは殆んどできなかつた。勤労奉仕と徴用の連続であつたし、同級生のうち進学したのは二、三人であった。伊江島へ徴用で行つた時は、最初は私は名簿からもれていたので行かなくても済むものと思っていたが、最後になつて残つた者だけひとまとめにして連れて行かれたのであった。

なかつた。

翌日、村の人々と一緒に帰る準備をしていると、またもや米軍機が襲つて来だが、その日は案外あつさりと飛び去つて行つたので、ようやく出港することができた。そして渡久地に着いたのは十二時頃であった。十・十空襲で焼野原と化した街を通り抜けて帰路を急いだ。崎本部に着くと、ちょうど兵隊たちを慰問するための演芸会の最中であった。私たちは、伊江島でさんさん苦勞をして命からがら逃げて来たばかりだったので、踊りなどに打ち興じている人々の気持を理解することができなかつたし、とても不公平なことだと思った。

だが、それ以来空襲に追われっぱなしで、二度と伊江島へ行くことはできなかつた。それで、当時崎本部に駐屯していた陸上部隊（船艦隊）へ勤労奉仕として出ることになった。兵隊たちと一緒に土を運搬したり、兵舎へのつける茅を刈りる作業などであったが、それは米軍が上陸する直前まで毎日続けられた。

米軍上陸

本部町崎本部 日 高 清 考（五二歳）

はじめて米兵に会う

米軍が上陸して来た時は、私たちは村から三キロも離れた山奥のウッカーという所に避難していた。宇土部隊が敗走して、真部山に食糧米をほつたらかしてあつたので、仲間と一緒に出掛けて行つて

それを拒いで来たこともあった。途中の山道には艦砲でやられた死体が転っていて、牛の大きさぐらいにふくらんでいた。

崎本部の人々は、安和の上のウシケーマタにも避難していたが、殆んどはウッカーにいた。そこには健堅の人々も数家族まじっていた。激しい艦砲の下で、人々はすっかりおびえきっていたが、それでも食糧を求めて山から下りて行かなくてはならなかつた。そして食糧を運んで帰る途中で、米兵に見つかって射殺された者も何人かいた。

私が最初に米兵を見たのは、村の上の畑で家族揃つて麦刈りをしていた時であった。突然数人の米兵たちが目の前に現われたので、もう逃げ隠れもできなかつた。私も女たちもただガタガタ震えて立つていた。すると隊長格の者が一枚の紙を差し出しながら、さかんに「ジャパニー、ジャパニー」を連発するので、私が日本兵であるか否かを確めているのだと判断して、首を振りながら「オキナワ、オキナワ」と答えると、何もせずにその紙切れだけを渡して立ち去つて行つた。それを見ると、この付近の山に日本兵が隠れていないかとか、住民は早く下山せよ、などということが書かれていた。

村に残った老人たち

私は村の人々が捕虜となつて羽地にひっぱられて行つたあと、しばらくはウッカーに残つていた。山の中に残つてゐたのは、私を含めて数人だけであったが、やがてそこへしばしば黒人兵たちが現われるようになつた。女が欲しいから世話をしてくれ、といふ素振りであつたが、彼らが来るとそこに居合せた老人たちがとても怒が

か住めるようにならなかつた。くじ引きでそれぞれのテントを決め、数家族ずつ一緒に住むこととなつたが、やっと足を伸ばして寝れるだけの広さであつた。また、すぐ近くに米軍の廐捨場があつたので、村人たちは、残飯の山をかき分け肉片やバターを探したりして、しばらくすると、軍靴や砲弾などで荒らされた耕地に作付をする人々の姿も見られるようになつた。

そのテント小屋での生活は、およそ三ヶ月も続いた。食糧も配給だけではなくて足りなくて、栄養失調で倒れたり、悪性マラリアで死ぬ者も続出した。

やがて人々は、山から木材を切り出し、茅を刈り集めて、焼跡に住居を建て始めた。そして十二月頃にはその新しい住居に移り、翌年正月早々から学校も始まるようになり、どうやら平和な生活に戻つた。

子供を三人かかえて

本部町崎本部 仲 地 マツ子（三八歳）

戦前、私の家族はラサ島に出稼ぎに行つてゐた。戦争が切迫して來たので、一九四四年（昭和十九年）の夏に引き揚げて來たが、村に帰るや否や、主人は防衛隊にとられて伊江島へ行つてしまつた。私は身重の体で三人の子供をかかえていたので、徵用は免れただけで、あちこちの家で日雇などをして、どうやらその日その日を送つてゐた。

つたので、私は機会を見つけてそのことをMPに連絡した。するとMPがパトロールしている間はどこかへ消えて姿を見せせず、MPがいなくなるとまた現われる、というイタチゴッコを繰り返すばかりで、老婆たちの不安はいつこうにおさまらなかつた。

そのうちに私は、何人かの米兵と親しくなつた。それで、ウッカーから村に下りて来て、焼跡にパラックを建てて住んでいると、時には私をわざわざ健堅まで連れて行つて、袋にいっぱいの罐詰をくれた米兵もいた。その時すでに浜崎や健堅には、米軍の兵舎や倉庫がいくつも立ち並んでいて、ドラム缶やトラックがたくさん並べられてあつた。

その頃になると崎本部では、山に隠れていた老人たちが下りて来て、それぞれの屋敷にパラックを建てて住んでいたが、時には申し合わせて羽地の家族たちへ食糧を運んだこともあつた。夜中に山道を通つて安和に出て、そこから屋部に至り、屋部川に沿つて為又に抜け、そこから伊差川へという道順であつた。

帰つて來た村人たち

崎本部の家は、五月下旬の空襲でその大半が焼け、さらにみんなが羽地にひっぱられて行つた頃にも、米兵たちがつけ火をして燃やしたので、焼け残つてゐる家はほんの数軒しかなかつた。だから、九月になつて羽地から村に帰り着いた人々は、まず雨露を凌ぐためのテント小屋を作らなくてはならなかつた。それで各戸から作業員を出してもらって、資材や茅を刈りに出掛けたものであつた。数日がかりで、学校や近くの畑にたくさんテント小屋を建て、なんどつたことであつた。

そんなある日、食糧を頭に乗せて登つて來たところを、米軍に捕まつた。私たちだけではなく、付近一帯の避難民は殆んどその日に捕虜となつてしまつた。米兵に銃をつけられながらゾロゾロと山を下り、そのままトラックで羽地へ運行されたのであつた。

だが、住めるような家はなかつたので、ある家の豚舎をきれいに掃除してそこに寝るよりほかしきたがなかつた。どの家も軒下まで人がふれていたし、畜舎ですらも、場所の奪い合いつい喧嘩ごしになる始末であつた。だが、さいわいにも私たちは、翌日には他の家の蔵に移ることができた。

そこで食糧難に苦しめられたために、当時三歳だった次女が栄養失調で死んでしまつたが、私は娘の死を悲しむ間もなく、その月のうちに三女を出産した。軍の病院でお産をしたが、当時は一合の米さえ貯えがなく、また産衣の用意もしていなかつた。それで出産後

かなり長い間空腹のまま放置されていたが、とうとう耐えられず、看護婦に訴えると、ようやくおかゆを作つて持つて来てくれたものだった。

悪性マラリアで倒れる

いよいよ村に帰れるようになったので、私も衰弱した体にむち打ち、生後間もない三女を背中にくくりつけて、人々について歩いて帰ることになった。といつても、仲屋次から嶺本部までは約三〇キロもあるのだから、産後間もない私にはかなり無理であった。それでも歯をくいしばって塙川までは辿り着いたけれど、それから先は一步も進むことができなくなつた。

どのようにして村に到着したのか記憶にないけれど、とにかく村に帰り着いてテント小屋に住むよくなつた。すっかり衰弱しきつた私を見て、親戚のある老人は「君はもうこれでは死ぬのを待つばかりだ。まつたくひどいことになつたものだ」と驚いていたが、だからといって救済の手を差しのべるだけの余裕は彼にもなかつた。

それから間もなく、当時流行していた悪性マラリアで、私も倒れてしまつた。その老人は再びやつて来て「生きているのが不思議なくらいだ。君はもう子供たちを残して死んじまうにきまつてゐるよ」と勝手なことを言つて帰つて行つた。そう言われると私は、むしろ肚がすわり、なにくそ死んでたまるかという気になつたものである。

すでに便所にも立てなくなつていたので、空罐に用を足していたが、きたないとか臭いとか言われて周囲の連中からいやがられたことが苦しそうに呻いていた。

その日の空襲で村の人たちは一段と重苦しい空気につつまれてしまつた。夕闇の中を兵隊たちがあわただしく往来し、避難の準備を急ぐ村人たちも恐怖におののいていた。私の家族もそのような村人の群にまじつて避難を急がなくてはならなかつた。私が苦しそうに呻いていた。

その日の空襲で村の人たちは一段と重苦しい空気につつまれてしまつた。夕闇の中を兵隊たちがあわただしく往来し、避難の準備を急ぐ村人たちも恐怖におののいていた。私の家族もそのような村人の群にまじつて避難を急がなくてはならなかつた。

あいつぐ米兵の暴虐

それから米軍が上陸するまで、私は健堅のウイバルという所にいた。そこからさらに一キロも離れた桃山^{とうやま}の山の中に避難小屋を作つてあつたが、ウイバルの方がなにかと便利だったからである。だが、上陸して来た米軍は、そこであいついでいまわしい事件をひき起こした。

戦前私の家の近所に照屋松助という頑丈な男がいた。当時彼は家族と別れて一人で瀬底に避難していたが、その日はたまたま健堅に戻つて来て家族とともにウイバルにいた。すこし体のぐあいが悪いということで寝ていたのである。そこへ突然銃を持った二人の米兵

と、それがまたなんとも耐えがたく辛かつた。

夫は生きていた

間もなく村の人たちは、山から資材を切り出して来て各自の住居を建てるようになったが、もとより私にはそれも無理だった。だから、みんながテント小屋から各自の家に移り住むようになつても、私は親戚に頼み込んで、その家の片隅に住まわせてもらうよりほかしかたがなかつた。

一方、伊江島に行つていた主人は、待てど暮らせど帰つて来てくれず、もう死んだものとあきらめていた。そこへ、まだ壕の中に隠れて生きている人々がいるらしいという噂が伝わつて來たので、早速伊江島へ尋ねて行つてみると、果して主人たちは壕の中で生きていた。一九四六年（昭和二年）の夏のことであつた。

米軍上陸

本部町健堅 山里宗富（五五歳）

艦船は燃え民家も焼けて

十月十日の早朝、私はいつものように丘の上で牛の草を刈りていた。すると海の方からドカンドカンというただならぬ音が聞こえて来た。海上に目をやると、おりしも瀬底と崎本部の間に停泊している四、五艘の輸送船をめがけて、米軍機が集中攻撃を浴びせているところであつた。はじめは友軍の演習だとばかり思い込んでいた私

が現われ、妻子に乱暴しようとした。たまりかねた彼は起き上がりて来て米兵の前に立ちはだかり、「私も海軍にいたことがあるが、君たちのように非道なことをしたことはない、さっさと帰りたまえ」とどなりつけた。言葉は通じなかつたものの、その場は何事もなくおさまり、米兵らはいったん引き上げたかに見えた。ところが、間もなく米兵らが戻つて来て、彼を叩き起こし、銃をつきつけて前へ歩くように命じ、前の原っぱに連れ出していきなり射殺したのであつた。

当時彼は五十歳をすこし過ぎていたとはいえ、まだまだ元気であった。若い頃の彼は、旧暦五月四日のハーリーの日に恒例として行なわれる相撲大会では、いつも優勝をあらそいほどの力自慢であった。それにひきかえ、米兵らは二人とも小柄でほそりした連中だったから、彼にその氣があつたら銃を奪い返して逆に殴り倒すこともできたろうに、彼はそういうことのできない実直な男であった。またその頃、米兵らは女性に乱暴をはたらくということとこわがられていた。野にも山にも米兵がうろついていて危険此の上なかつたが、それでも人々は食糧を求めて村まで下りて来ざるをえなかつた。当時ウイバルに大きな瓦葺の家が残つていて、そこに避難民が常時十数名ぐらい集まっていたのも、そのためであつたが、ある晩、その家でいまわしい強姦事件が発生した。

脣のうちにそこを徘徊していた数人の黒人兵は、家中に何人かの女性がいるのを見ていたのである。その晩おそらく、黒人兵らが突然その家の中に踏み込んで來た。大声をあげて逃げまどう婦人たちを追いかけ、一人ずつわし掴みにして間に消えた。相手は銃を

持つケモノたちである。その場に居合せた男たちには、どうすることもできなかつた。

私たちは、もはや一日とてそこにとどまつてはいられなかつた。急いで荷物をまとめて桃山の避難小屋に移動したが、そこもやはり危険だということで、落ち着く間もなく、伊豆味の山の中に逃げることとなつた。

食糧を求めて

八人の家族が持てるだけの荷物を担ぎ、おまけに私は、八十歳の老母の手を引きながらの移動であった。やつと伊豆味の山の中のエンナという所に辿り着いたが、数日もたつと食糧が尽きてしまつたので、そこでは食べられるものはないでも食べた。

女たちが出歩くと危険だと思われたので、私は一人で連日食糧を求めて歩き廻わつた。夜になると健堅まで下りて来て芋を掘り、暗い山道を数キロも独りで帰つたこともたびたびあつた。

やがてエンナも危険でいられなくなつたので、こんどは今帰仁の山へ逃げることになつた。途中の道端には艦砲でやられた人々の死体がいくつも転がつてゐた。また、いまや戻れる人さえいない避難小屋には、毛布で包まれたままの死体がたくさんあつた。私たちはますます死の恐怖につきまとわれ、ひどい食糧難に苦しまなくてはならなかつた。

久志の捕虜収容所にて

さらにならなかつた。私はすでに餓死寸前であった。その

村に帰つては來たけれど

そのうちにそれぞれの村に帰れるようになつた。だが、健堅には米軍の兵舎や倉庫が立ち並んでいて、すぐには戻れなかつた。それで、一、二か月の間崎本部の学校の近くにテントを張つて過ごさなくてはならなかつた。私の家族は、久志にいた時は誰もマラリアに罹らなかつたが、崎本部に来てから悪性マラリアに感染してしまつた。私の家族はみんなどうにか命だけは取り留めたが、それで亡くなつた者も少なくなかつた。私の知人の中に、山の中に避難している時に妻に先立たれ、マラリアに罹つても看病してくれる者もなないまま、とうとう一人で死んで行つた氣の毒な男があつた。

崎本部から村に帰つて来た時、さいわい私の家はまだ残つていた。といつても壁板も床も殆んどなくなつてゐたし、柱も數本はなくなつていていた。米軍が壁も床も全部はぎとつて、倉庫として使用していたのであつた。壁にはカバーが張りめぐらされ、家中にはまだダイナマイトや釘などが積まれてあつた。それらをかたづけて、どうやら住めるようになるまでにはかなりの日数がかかつた。食糧事情もいざんとして悪く、蘇鉄をはじめ、食べられるものは何でも食べた。また、私の畑は米軍宿舎の跡にあって、厚いコンクリートが張られていた。それをツルハシなどで叩き壊し、固くなつてしまつた土地を掘り起こすのは、並大抵ではなかつた。おかげでさらに数か月の間、芋を食べることもできずに、蘇鉄などがまんをしなくてはならなかつた。

船員

本部町健堅 城 間 盛 德 (二八歳)

重傷者に非情な軍隊

戦前、私は海龍丸という漁船の乗組員であつた。十・十空襲の日は、七千斤余の魚を積んで渡久地に向かう途中、ちょうど伊江島の後方のフカンスングワまで来た時、グラマンの猛襲撃に見舞われた。乗組員のうち二人が即死し、私の家の父が大腿部貫通の重傷を負つた。船もたちまち火災を起し、ブリッジから後半分が燃え、機関室も燃料タンクなどもやられてしまつた。

グラマンが飛び去ると同時に消火作業を開始し、どうにか火を消しとめることができたので、フカンスングワに錨を下して、その晩はそこに停泊することにした。間もなく屋間の消火作業の疲労で乗組員はみんなぐっすり寝入つてしまつたが、気がつくと、船は沖へ沖へと流されていた。みんなで手をつくして機械を動かし、やつとのことで渡久地港に歸り着くことができた。だが、屋間の空襲で街はすっかり焼野原と化していだ。私は負傷したおやじを背負つて家路を急いだ。

当時浜崎にも陸軍部隊(船舶隊)が駐屯していたので、村に着くとすぐに部隊へ行つて治療をお願いしたのだが、簡単な消毒を施しただけで、薬がないからもう来るな、と言われた。来るなと言われたつて、こちらは重傷患者を放つて置くわけにはいかなかつた。それで翌日もまた行つてみたが、来るなと言つたのになぜ連れて来たん

時、住民は何月何日までにどこそに集合せよ、ということ伝達が届いた。さもなければ掃蕩戦で殺されてしまうぞということであった。それで避難民は続々と山から下り始めた。私たちも山を下りて今帰仁の今泊に行き、そこからトラックで久志に運ばれた。

久志には七、八ヶ月もいた。はじめは五〇人ずつ、あるいは百人ずつ大きなテントに収容された。中には敷物もなく、土の上に寝るということであった。それで人々はとりあえず草を刈りて来て敷き、その上に住んでいた。文字通り家畜同然の生活であった。

だが、やがて私たちは、山から材木を切り出し茅を刈り集めて、自力で小屋を作つて住まうようになつた。

食糧もまた惨めであった。すでに団長も任命されており、配給主任を通じて一人何合、何個というふうに支給されてはいたものの、それだけではなんとしても足りず、誰もが栄養失調気味であった。働き手のいる家族はそれでもまだましな方で、実際に栄養失調で死んだ人々もたくさんいた。だから私たちは、久志から脱出して、羽地を経て健堅まで芋を掘りに来るようになった。帰りは羽地の川端で一息入れてから明治山を通りて久志に向うのであつたが、明治山付近まで来ると、日本の敗残兵らが道にはいつくばつて恵みを乞うので、はるばる想いで来た芋などを少しづつ分けてあげたこともたびたびあつた。

また、久志の入口にはC.P.が待ち構えていて、越境者を検査するとして、荷物を取り上げる者もいた。私も二回取り上げられた。八里も九里も想いで来たものを奪われた時の悔しさは今もって忘れることができない。

だ、と叱りつけられた。それでやむなく渡久地まで背負って行つたが、そこでも治療は施してもらえなかつた。そのうちにウジが湧いて來たので、浦崎まで足を伸ばし、その民間の病院に入院させてもらうことになつた。そこには、十・十空襲で傷ついた人々が所狭しとひしめき合つていた。

一斉射撃を浴びて

私へ召集令状が来たのは、十一月三十日の夜中の二時のことであつた。急いで軍服と奉公袋を受け取り、四時に所定の場所に集合して、そこから渡久地の波止場へ連れて行かれた。私は数年前に大阪で自動車の免許証を取得していたので、名護の部隊に配属され、読谷から名護へ糧秣を運搬する任務を与えられた。

米軍が上陸した直後のある日、いつものように名護の街を通り抜けようとしているとき、いきなり米軍の一斉射撃に見舞われてしまつた。そして瞬時に後部の荷物が燃え始めたので、私は夢中になつて全速力で逃げた。羽地の田井等で車を止めて火を消し、再び車をとばして伊豆味まで逃げ、そこで車を乗り捨てて、干麺包と僅かばかりの玄米を持つて家族のもとへ帰つた。

今帰仁の山に隠れて

私が家族のいたウッカーに着いて間もなく、崎本部のハニクの浜から米軍が上陸し、付近一帯の避難民が慌てて移動し始めた。私も急いでそこから逃げ、安和の山奥にあるタマターという所に壕を掘つて隠れた。雨が何日も降り続いた。艦砲がますます激しくなつた。

カの軍艦がぎっしり浮んでいた。すっかりくたびれていた私たちはそこで昼過ぎまで寝て、それからウイバルに下りて来た。そして壕から衣類を出して着替えた。数十日の避難生活で体は垢だらけとなつていたし、ノミやシラミがたかっていた。私は、米軍に見つかつたら殺されると思つていたので、ひげも伸び放題に伸ばしていた。村に戻つてようやく落着いた頃に、弟の家族も戻つて來たので、ともに無事を喜びあい、一緒に過ごすこととなつた。

捕虜となつて

だが、間もなく米軍の掃蕩戦が始まり、一緒にいた村の人々はみんな羽地にひっぱられて行つた。私と弟の二人は、捕まれば兵隊とまちがえられるからといって、大浜の上の自然壕に隠れることにした。それはかなり広い壕で、布団とむしろを持ち込み、時にはランプをともして過ごすこともできた。

そんなある日、食糧を求めてウイバルまで来ると、突然数人の米兵がやって來たので、慌てて付近の民家に駆け込み、庭先に積まれていた木箱の中にもぐり込んで、どうやら命拾いをしたことがあつた。だがその頃、同じウイバルで米兵に見つかり、夫は射殺されその妻も輪姦されるという事件が起つた。突然米兵が現われたので、その夫は慌てて天井裏に逃げ込んだが、妻の泣き叫ぶ声を聞いて、助けようとして出て来たところを射殺された、ということであった。さらにその事件のほかにも、若い娘が連れ去られて輪姦されたこともあつた。

ある日、ウイバルから帰つて來たところを、突然現われた米兵に

て來た。やがてそとも危險だということで、その山の裏側にあるシギシキに移動した。

シギシキに着くと、そこにはまだたくさんの友軍がいて、米軍を迎へて来たので、私たちは両方に挟まれてしまつた。もはや一刻もそこにとどまつてゐるわけにはいかなかつた。私は足を怪我して歩けなくなつていた老母を背負い、家族をせきだてて今帰仁の山へ逃げた。激戦の最中に瀕死知りの老夫婦に出会つたが、もはや助けでやるだけの余裕はなかつたので、見捨てるよりほかななかつた。

今帰仁の山には瀕死の人々がたくさん避難していた。しばらく一緒にいたけれど、生後間もない私の娘が泣き出たびに、「この子のためにみんなが危険な目に会うのはごめんだから、早く絞め殺してくれ」などと叱られたので、私の家族はみんなから離れた所に避難小屋を作つて隠れることになった。だが、間もなく食糧が尽きてしまつたので、やはり健気に帰つた方がいいとおもい、家族を引き連れて戻ることにした。

途中のウツチントウという所で猛烈な艦砲射撃をくらつたり、伊野波では米軍に会つて命からがら逃げ出したことはあつたが、どうやら真部山まで辿り着くことができた。そしてそこから桃山に下りてみると、付近一帯に警戒線が張りめぐらされていたし、水槽や罐詰がたくさん放置されていた。私たちはみんなひもじかつたけれど、罐詰にはさつと毒が入つているにちがいないということでの誰も食べようとはしなかつた。

そこから海上に目をやると、瀕底から伊江島に至るまで、アメリカ軍機が飛んで来て、船や街に爆弾を投下したので、船も街もたうちまゝ炎につつまれてしまつた。

また、三月下旬には瀕底でも空襲に見舞われた。私の家も焼けてしまつたので、それからは墓を開けて、その中で過ぎなくてはならなくなつた。家も焼け、金もなくて途方に暮れていると、間もなく、瀕底は危険だから本島に急いで避難せよとせきたてられた。それで大急ぎで荷物をまとめ、島の人々と一緒に本部の山奥に避難することになつた。チンラガーラの南側にミジントウという所があつたが、すでにそこに避難小屋を作つてあつたからである。

本部山中への避難

本部町瀕底 上間ウシ (五十歳)

十月十日の空襲の時は、前の海に数隻の船が停泊していた。そこへ米軍機が飛んで来て、船や街に爆弾を投下したので、船も街もたうちまゝ炎につつまれてしまつた。

また、三月下旬には瀕底でも空襲に見舞われた。私の家も焼けてしまつたので、それからは墓を開けて、その中で過ぎなくてはならなくなつた。家も焼け、金もなくて途方に暮れていると、間もなく、瀕底は危険だから本島に急いで避難せよとせきたてられた。それで大急ぎで荷物をまとめ、島の人々と一緒に本部の山奥に避難することになつた。チンラガーラの南側にミジントウという所があつたが、すでにそこに避難小屋を作つてあつたからである。

息子の戦死

ミジントウに着いてしばらくすると、にわかに艦砲射撃が激しくなり、避難の動きもあわただしくなった。ある日、友軍の兵隊たちが私たちの避難小屋の前を通りかかった時、親戚の者が私に「あなたの息子の兼和は戦死してしまったらしい」と知らせてくれた。兼和というのは私の六男で、護衛隊に入っていた。あんなに元気に出发した息子が死んだとは、どうしても信じられなかつたので、私はすっかり取り乱して兵隊たちの前で泣き叫んだ。「兼和はどこにいる。私の兼和をどこへ連れていったの」と泣きながら訴えると、護衛隊の村上隊長は「我々もいつかは死ぬんだ。死ぬのはあなたの息子だけではない」ときつく叱られた。

だが、間もなくミジントウも危険となり、いつまでもそこにいるわけにもいかなかつたので、私たちは、わずかばかりの米と桶や釜を扱いで、急いでそこから逃げた。どこというあてもなく、一寸先は闇であった。事実、私たちのほんのすこし前を歩いていた親子が一瞬のうちに艦砲でやられたのも、その頃のことであった。

彷徨そして帰島

やがて私たちは真部山に辿り着いた。そこには擬装した兵隊たちがたくさんいたし、陣地もみごとに擬装されていた。私たちの行手に兵隊たちが立ち塞がっていたので、通してくれと頼むと、「戦闘はあと三日もすれば勝つから、その辺で待っている」と言われた。しかし、言われた通りじつとしている、どういうことになるか知れたものではないと思ったので、そこから引き返して別の道から逃げることにした。食事はオニギリを一個ずつ配るのがやっとであ

つたから、大人も子供もすつかり瘦せ細つていて、暗い山の中をてもなくさまよつてゐるうちに、深みに落ちて怪我をしたこともある。また、前方から軍用犬を連れた米兵が来るのを見つけ、びっくりして溝に転がりこみ、息を殺してやつとのおもいで命拾いしたことあった。

瀬底を出てから二十一日目の夜、私たちは島の見える所まで戻つて来た。そして、どうせ死ぬなら生まれ育つた島で死んだ方がましだという思いに駆られて、浜崎で小舟を見つけ、板切れで縄を作つてやつと瀬底に帰り着くことができた。私たちよりも前に二、三の家族が戻つていたが、私の兄弟たちはまだ誰も来ていなかつたし、行方も分らなかつたので、みんな死んでしまつたのなら自分たちだけ生き残つても甲斐がない、と悲嘆にくれたものであった。

それでもしばらくは、壕の中で過ごしていた。入口を木の葉などで擬装し、中には畳まで敷いてあつた。そこへある日、突然米兵が現われた。私たちが壕の中で息を殺していると、米兵は入口までやって来て中の方を眺いていた。米兵の形が壕の中に映つて、いまにも入つて来るかと思われたが、誰もいないと思ったのかそのまま立ち去つて行つた。ほんとに命のちぢむ思いをしたが、それ以後は何事もなく過ごすことができた。私たちは、まず森から木材を切り出して来て住居を作り、畑に芋や麦などを植え、芋で酒を醸造したりして新しい生活を始めた。

大阪から来た手紙

そんなある日、本土の船員たちが島に上陸して來た。本土の話を

聞いているうちに、手紙を書けば鹿児島の警察に届けてあげる、そうすれば東京だって大阪だって連絡がつく、ということであった。私は大急ぎで息子たちに手紙を書かせ、それを大阪の次男あてに届けて欲しいと頼んでみた。もちろん、船員たちはそれを承諾してくれた。

その手紙は戦後瀬底から大阪に届いた第一報であったとのことである。それは瀬底出身の大坂在住者の間で、ボロボロになるまで廻し読みされたと言われたものだが、間もなく大阪からみんな元気であるという返事が届いた。それで親戚や知人が私の家に集まつて来て、ありつけの酒を飲み干し、大阪在住者の無事を祝つた。

瀬底では、どういうわけかマラリアは流行しなかつた。また、島に戻るとすぐに芋や麦を植えておいたので、食糧に困るということもなく、本部や久志からさえ芋を買ひに来るほどであった。砂糖を作つてこちらから本部半島一円に売り歩いたこともあつた。だから戦後のあの食糧難の時期にも、栄養失調で倒れた者もなく、マラリアで亡くなった者もいなかつたことは、私たちにとって大きな喜びであった。

避 難

本部町大浜 末 吉 カ メ (五五歳)

十・十空襲の前後

戦前はこの村はカツオ節製造がさかんで、海岸には大きなコンク

銃弾に娘を奪われる

年が明けると空襲はいよいよ激しくなって来た。私たちはすでに伊豆味山中のミントウという所に避難小屋を作つてあつたので、三月の末にそこへ移つた。やがて艦砲が激しくなり、ミントウでもたくさんの方が出た。私の知人も二人の子供とともにそこで亡くなつた。私たちは一〇人家族であったが、もうそこは危険だからよそへ移動しようとなり、艦砲の下をくぐつてようやくフルガツウまで通り着いた。友軍の兵隊が「明日は米軍が上陸して来るはずだから気をつけるよ」と注意を与えて行つたが、はたしてその翌日、米軍が上陸して来て激しい銃撃戦が始まつた。避難民たちは、ただ死の恐怖におびえて山の中を右往左往するばかりであった。多くの人々が傷つき死んで行つたが、当時十八歳の私の四女もついに八重岳の近くで銃弾に当たつて死んでしまつた。そこでは、浜崎の人々もたくさん亡くなつた。

私たちは悲しみにくれ、恐怖におびえていたが、一刻も早くどこかへ移動しなくてはならなかつた。その晩は壕の中でありつたけの飯を炊いて食べ、翌日のオニギリも用意した。そして翌日の晩、私たちは今帰仁の山の中へ移ることになつた。

かりであつた。多くの人々が傷つき死んで行つたが、当時十八歳の私の四女もついに八重岳の近くで銃弾に当たつて死んでしまつた。そこでは、浜崎の人々もたくさん亡くなつた。

私たちは悲しみにくれ、恐怖におびえていたが、一刻も早くどこかへ移動しなくてはならなかつた。その晩は壕の中でありつたけの飯を炊いて食べ、翌日のオニギリも用意した。そして翌日の晩、私たちは今帰仁の山の中へ移ることになつた。

食糧運搬

暗い山道を越えてようやく今帰仁の山に辿り着いたが、もう食糧は殆んどなくて、数本のカツオ節が残つているだけであつた。だが、二、三日なにも食べずにいたところへ、人がやって来て、いくらかの米を分けてくれたので、どうにかその場を凌ぐことができた。オニギリを二つずつ分けて、スプーンで少しづつ口へ運んで食べ

るが明けると空襲はいよいよ激しくなつて來た。私たちはすでに伊豆味山中のミントウという所に避難小屋を作つてあつたので、三月の末にそこへ移つた。やがて艦砲が激しくなり、ミントウでもたくさんの方が出た。私の知人も二人の子供とともにそこで亡くなつた。私たちは一〇人家族であったが、もうそこは危険だからよそへ移動しようとなり、艦砲の下をくぐつてようやくフルガツウまで通り着いた。友軍の兵隊が「明日は米軍が上陸して来るはずだから気をつけるよ」と注意を与えて行つたが、はたしてその翌日、米軍が上陸して来て激しい銃撃戦が始まつた。避難民たちは、ただ死の恐怖におびえて山の中を右往左往するばかりであった。多くの人々が傷つき死んで行つたが、当時十八歳の私の四女もついに八重岳の近くで銃弾に当たつて死んでしまつた。そこでは、浜崎の人々もたくさん亡くなつた。

私たちは悲しみにくれ、恐怖におびえていたが、一刻も早くどこかへ移動しなくてはならなかつた。その晩は壕の中でありつたけの飯を炊いて食べ、翌日のオニギリも用意した。そして翌日の晩、私たちは今帰仁の山の中へ移ることになつた。

かりであつた。多くの人々が傷つき死んで行つたが、当時十八歳の私の四女もついに八重岳の近くで銃弾に当たつて死んでしまつた。そこでは、浜崎の人々もたくさん亡くなつた。

私たちは悲しみにくれ、恐怖におびえていたが、一刻も早くどこかへ移動しなくてはならなかつた。その晩は壕の中でありつたけの飯を炊いて食べ、翌日のオニギリも用意した。そして翌日の晩、私たちは今帰仁の山の中へ移ることになつた。

米兵の非道ぶり

やがて私たちは仲尾次から引き揚げたが、すぐに村には帰れず、しばらくは桃山のテント小屋で過ごさなくてはならなかつた。南国とはいえ沖縄の冬も寒い。それなのに人々は殆んど寝具らしい寝具を持ち合せていなかつた。食糧事情もいぜんとして悪く、飢えと寒さに苦しみながら、マラリアの猛威の前になすすべもなく、毎日のように誰かが死んでいくのであつた。

間もなく私たちは、桃山から辺名地に移つて來た。そこにはしばしば米兵が現われたが、普通の米兵はとくに悪いことをするようすでもなかつたので、私たちは安心していた。ところがそのなかに、住民から鬼のようにこわがられている者がひとりいた。やせっぽちのシビリアンと呼ばれていたが、彼はいつも銃を持ち歩き、男といふ男はかたっぱしから捕まえてひっぱつていつたし、若い女性には

息子をうしなつて

本部町辺名地 並 里 カ メ (四九歳)

息子の応召

戦争中は長男が内地に行つていたので、こちらに残つていたのは私たち夫婦と次男と娘が二人の五人だけであつた。だが、次男はまだ十九歳だというのに、現地召集とかで入隊せよといふ命令が来ていた。

十月九日には、村の拝所にたくさんの人々が集まつて、戦勝祈願を行なつた。谷茶や大浜の人々も、青年団や処女たちも、全部そこに集まつて一緒に御願をあげていた。

そして翌日も、早朝からそこで御願をあげていると、突然異様な爆音とともに数機の米軍機が現われ、伊江島の上空を旋回し始めたかとおもうと、いきなり爆弾を投下し始めた。ものすごい爆音が聞こえ、やがてあちこちで火の手があがり、黒煙につつまれていくありさまが手に取るように見えた。当時伊江島には、辺名地からも一家の主人や青年男女が徴用で行つていたので、拝所に集まつて来た人々は、爆弾が投下されるたゞごとにわが身を切られるかのような悲痛な叫び声をあげていた。

当時、私の長女も伊江島を行つていた。それで次男は、親たちが長女のことを心配するのを見かねて、翌朝、サバニ（小舟）を漕いで伊江島に渡り、夕方の七時頃にはつれ戻して来ていた。そして彼は、その翌日、応召で伊豆味から出発の予定であったが、空襲が激

べたものであった。それからあとは、親戚や知人から米を分けてもらつたり、あるいは友軍の陣地から食糧を捐いで来たりして、どうにか食い継いでいた。

このようにして今帰仁の山には數十日いたが、やがて主人と息子は米軍に捕まつて久志に連行されてしまつた。食糧を求めて山から下りて来たところを見つかつてしまつたのであつた。それから間もなく、私たちも羽地の仲尾次にひっぱられて行つた。家族がはなればなれになつてとても心細かつたけれど、私たちは女だけで村から仲尾次まで食糧を運び、さらにそれを久志まで捐いで行つたこともあつた。

しかつたので、家に戻つてもう一晩だけ家族とともに過ごし、翌三日には村の十字路からみんなに見送られて出発した。

息子の遺骨を尋ねて

息子たちは、中西の国民学校で石部隊に入隊して、浦添村の内間で壕を掘つたりなどしていたが、私たちはそこへ何回も面会に行つたことがある。また息子も、二日間だけ休暇があつたといつて、村まで帰つて来たこともあつた。そして家族と楽しく語り過ごして、二口日の午前三時頃にこちらを出発した。私は大浜の橋の近くまで送つて行つたが、息子は「お母さんまた正月に来て下さい」と言いながら別れたものであった。あの時に、誰に何と言われようが引き留めておけばよかつたものを、息子は「そんなことをして、もし戦争に勝つようなことがあれば、家族そろつて大変なことになるといふから」などと冗談を言つて笑つていたが、とうとうあの時に別れてしまになつてしまつた。

息子は、西原村の棚原で死んだとのことであるが、どこでどのようにして死んだのかさだかではない。それで私は、羽地の収容所にいた頃に、息子たちと一緒に戦闘に加わつた人々には、「一人ひとり尋ねて廻わつた。するとその中に、息子の最後のもようを知つている人がいたけれど、私に向かつて、「母親のあなたにそのことを教えたら、あなたはショックで寝込んでしまうだろう」などと言うので、私は「足が切れていようが、首が吹っ飛んでいようが、もうそんなことで驚きはすまい。きちんととむらつてあげたいだけですか」と、何度も頼み込んだのだが、なぜか彼等は本当のことを教えられた。

久志まで食糧を運ぶ

本部町辺名地 川 平 力 ナ（四八歳）

私たち、艦砲に追われて、しばらくはユキンガーの避難小屋にいたが、すぐ下まで米兵が来ていたし、銃声も激しくなつて来たので、慌てて山の中へ逃げ込んだ。昼は山の中に隠れていて、暗くなつてから避難小屋まで下りて来たりしていた。だが、数十日もそのままにして過ごしてゐるうちに、食糧はなくなるし、毎日のように死者が出たので、そろそろ下山しようではないか、という話が持ち上がつた。米軍が山を焼き払うらしいという噂もあつたので、私たちも山を下りて今帰仁の崎山に行つた。そこでは民家の世話になつたが、家主がとても親切な方で、みんなに味噌などを分けてくれた。

旧暦の五月十五日に、私たちはそこから久志に連行された。名護あたりの海で一人残らず殺すつもりらしい、などと黙つてみんな大

声で泣き叫んだものであつた。

久志に着くと、秀山に張られたテントだけが立ち並んでいて、そこには収容されて來た人々が所狭しとひしめき合つてゐた。それでもなく人々は、各自で資材と茅を集めて、掘立小屋を建てて住むようになつた。

食糧も全然足りなかつたので、人々は作業に出る時は袋などを持つて行き、落ちこぼれた米をこつそり拾つて帰つたりしていた。そのほか、ツワブキやニガナをはじめ海の藻など、食べられるものは何でも食べたが、みんないつも腹へこだつたので、久志からここまで食糧を取りに通つたこともたびたびあつた。

屋間は米兵に見つかると危険であつたから、夕暮れ時に向うを出发し、明方にこちらに着くのであつた。老婆なども人々にまじつて歩いていたが、暗い山道だから何度も転んでいたものである。若い連中は来れなかつたので、老婆たちも老嫗にむちうつて通つたのであるが、久志の入口まで來ると『道端巡回』が待ち構えていて、老婆たちの荷物を取り上げるのであつた。彼等はCPなどといつて威張つていたが、せつから八里も九里も扭いで來た荷物をかっぱらわれた人々は、まことに氣の毒であつた。

収容所の頃

本部町桃山 島 細 和 恵（一三歳）

羽地へ食糧を運搬する途中で米兵のトラックに乗つたら、屋部の

てくれなかつた。浜元にも棚原で肉親を亡くした方がいたので、別の日にはその方と一緒に再度行つて頼んでみたが、やはり無駄であった。誰が誰やら見分けもつかないということであれば、それはそれで弔う方法はあるからと、熱心に頼み込んだのだけれど、ついに聞き出すことはできなかつた。息子はとても健康体で、高等二年を卒業するまで一日たりとも学校を休んだことがなかつた。それだけにその遺骨にさえ会えなかつたことは、残念でならなかつた。

私たち、艦砲に追われて、しばらくはユキンガーの避難小屋にいたが、すぐ下まで米兵が来ていたし、銃声も激しくなつて来たので、慌てて山の中へ逃げ込んだ。昼は山の中に隠れていて、暗くなつてから避難小屋まで下りて来たりしていた。だが、数十日もそのままにして過ごしてゐるうちに、食糧はなくなるし、毎日のように死者が出たので、そろそろ下山しようではないか、という話が持ち上がり、米軍が山を焼き払うらしいという噂もあつたので、私たちも山を下りて今帰仁の崎山に行つた。そこでは民家の世話になつたが、家主がとても親切な方で、みんなに味噌などを分けてくれた。

旧暦の五月十五日に、私たちはそこから久志に連行された。名護あたりの海で一人残らず殺すつもりらしい、などと黙つてみんな大

近くで脇道に入ったので、大声をあげて泣き叫び、車を止めさせて下りた。強姦事件の噂もいろいろ聞いていたし、そのままついて行くと、なにをされるかわからないと思ったからである。

そして荷物もほつたらかして大通りに飛び出し、なおも大声で泣き続けた。するとそこへ、MPの乗つたジープが通りかかって私の側に止まつた。どうせ言葉は通じなかつたが、「ほかの車に乗せてもらつたら、へんな所へ連れて行こうとしたので、泣き叫んでやつと下ろしてもらつた。どうか羽地へ連れて行って下さい」と頼んだら、あつさりと乗せてくれた。それでも羽地に着くまでは、また山の中へ連れて行かれはせぬかと、不安でしかたがなかつたが、無事に羽地に到着した時は、MPというのは本当にありがたいものだと思つた。

また、伊差川では、時には夜中に米兵が来て、若い娘を連れ去ろうとしたこともあつた。それで時々MPがまわつて来ていろいろ調べたりしていた。黒人兵が來た時などは、空罐やバケツなどをカンカン叩いて大騒ぎをしたものであつた。

食糧が足りなくて、口べらしのために作業に出たが、当時の惨めさはなんともいえなかつた。女学校を出た者や教師などは、殆んどアメリカ軍の洗濯婦となり、ワッシャンシガールなどと呼ばれてゐるが、私たちは洗濯婦になることもできずに、いつも荒れ果てた水田に連れて行かれて稻を植えさせられた。

なかには夫を亡くした女学校出の女性が、キャプテンの秘書となつて一緒にいたり、ハーネーになる者が出来たり、そんな話がいろいろあつた。

また、私は炊事婦として働いていたこともあったが、食糧がなくて、家族がいつもひもじい思いをしていたので、夜中に他人の畠に行つて、みんなが掘つたあとから、親指大の芋を拾い集めて歩いたこともたびたびあった。それにヨモギを入れて煮て、いつもそればかり食べていたので、そのうちに子供たちは栄養失調のために、頭髪が抜け落ち、頭ばかりでかくなり、骨と皮だけの見るも哀れな格好になっていた。

焼跡に涙を流して

本部町桃山 松田 マツ（六三歳）

米軍が上陸して来た時、私たちはチンラガーの壕に一晩だけ隠れていた。その翌日は、早朝からすぐ近くで激しい銃声が聞えて来たので、そこからさらに山奥に逃げ込み、ようやくマヤーガーに落着くことになった。

夜になると山を下りて、食糧を探しに来たものだったが、せつかく担いで帰った食糧を友軍の敗残兵らに奪われてしまつた人々かなりいた。私たちと、軍の陣地からお菓子の袋を三つ担いで来て隠してあつたが、軍が捨てて行ったのだからいいのだろうと思つていたのに、ある晩、谷茶出身の男と兵隊が一緒に現われ、このお菓子は軍のものだから、などと言いながら奪つて行つてしまつた。孫たちにさえ与えずに大事に隠して置いたものを有無を言わせずにかっぱらつて行つたんだら、まったくひどい連中だった。

本部町渡久地・浜元（座談会）

十・十空襲

宮城 有造（四五歳）
備瀬 恵子（三一歳）
金城 マツ（二七歳）

れそうになつたことがある。溝の中を犬のように這つて来るのを見つけ、せつかく拾つた芋を放り投げて、一目散に逃げて帰つたものであつた。すぐ近くにM.P.がいるからといって、少しも油断できなかつた。

捕虜になるまで

宮城 一九四四年（昭和十九年）十月十日の朝、私は午前七時頃異様な物音で目がさめた。慌てて外に出てみると、瀬底の沖に停泊していた巡洋艦や商船がドカンドカンと猛爆撃を浴びている最中であった。間もなく街中にサイレンが鳴り響き、警防団の連中が集まつた。間もなく街中にサイレンが鳴り響き、警防団の連中が集まつた。當時私は、在郷軍人会の会長で警防団の副団長を兼ねていたので、すぐに任務についた。

おりしも、接岸中の商船日本丸（約百トン）から火の手が上がつたので、我々はまず、その消火にあつた。米軍機がやって来ると慌てて海にもぐり、飛び去ると消火を続けるという、まことに危険な任務であった。

だが、間もなく、晴部隊（船舶特攻隊）の弾薬庫が爆破され、炸裂弾が大音響とともに街中に飛散し、街は一面の火の海と化した。

私たちの家は茅葺きであったが、マヤーガーに隠れている間にすつかり焼けていた。たくさんいた豚や山羊などの家畜も、タンスも家財道具も、ことごとく灰になつたし、親戚の家も殆んど焼けてしまつていた。山から食糧を取りに下りてそれを知り、焼跡に呆然と立ちつくして涙を流したものであった。

女性をねらう米兵たち

私たちは数十人の避難民と一緒に隠れていたが、ある日突然、米軍に取り廻まれ、銃をつきつけられた。米兵たちは避難小屋の中までついて来て、着物も食糧も全部あるから早く歩けと、さかんにせきだてていた。

そして羽地の田井等に連れて行かれ、そこで一泊して、翌日は伊差川に移された。伊差川では配給もあつたが、M.P.が時々まわつて来てお菓子などをくれたし、孫たちが熱発した時もわざM.P.がまわつて来て、罐詰やお菓子などをもらつたこともあつた。

しかし、食糧は配給だけではとても足りなかつたので、各自の村まで食糧運搬で通つたものだったが、途中の山で婦人たちは、米兵に襲われたり追つかれられたりしたことがたびたびあつた。だから私は、若い連中を伊差川にとどめて一人で通つていたが、あとになると、年寄りもやられるとか、山の中に潜んで女性を待ち構える米兵が多い、などという噂が伝わつて來たので、こわくて帰れないくなつてしまつた。事実、羽地でさえも芋を拾つて歩いていると、米兵が、まるで犬のように背を低くして接近し、突然襲いかかつて來ることもあつた。私も知人と二人で芋を拾いに行ってあや襲わになつた。

私たちも命からがら壕に駆け込んだが、壕内は晴部隊の負傷兵たちでたちまちいっぱいになつた。

その日の空襲で、渡久地と谷茶は八割ぐらい焼けてしまつたし、警防団員も二人殉職した。また、それ以来、住居を失つた人々は、伊豆味や大堂へ避難し、役所の事務も並里の壕で行なわれるようになつた。

ナンガの壕に食糧米が放置されていることが知れたり、その晩のうちに全部持ち運ばれたことであった。

備瀬 一僕で六〇キロぐらいあった米俵を、どこからそんな力が出たのか不思議だったけれど、私もその時は必死になつて運んだ。それでしばらくは食い繼ぐことができた。

私たちには、三家族九人で満名のウンタチ橋を越えてトムイ山に避難していたが、激しい砲弾の間をぬつて、しばしば芋掘りに通つたものだった。真暗な山道に迷い込んで、ふところにぬくめてあったマソチをすりながら、やつとのことで壕まで辿り着いたこともあつた。

金城 大堂も猛烈な艦砲射撃を浴びた。殆んどの人々は谷底の壕に避難していただけれど、壕内の空気が汚れて悪臭を放つていたので、老人や子供たちは非常に苦しめがっていた。老人たちは「日本がアメリカーに勝てるわけがない。絶対にかないっこない」などと言つては、若い連中に叱られていた。このようにして、谷底の壕に二ヶ月余も避難していたが、旧の五月十五日（新六月二十四日）に、下山せよという命令を受けて、付近一帯の人々と一緒に兼次に集合することになった。そこで万一米兵に捕まつて乱暴でもされてはと警戒して、顔中に鍋墨をぬつて歩いていたら、米兵らはそれを見破つてニヤニヤ笑つていたものだった。

備瀬 私の父もイムクジ（芋で作った澱粉）を髪につけて、いかにも老人の格好をしていたが、米兵はその父を捕まえて、まず肩を調べて背のうの跡がないのを確めてから、オッケーと言つていた。私も男装をして、顔に鍋墨をぬり、ムンジユル笠（沖縄の農民独特のアメーラーをすりながら、やつとのことで壕まで辿り着いたこともあつた。

いた場所に戻つた。それから約四〇日間、私は友人と二人でずっとそこに隠れていた。

ある日その友人の親戚の婆さんが訪ねて来て、早く捕虜になつて久志へ来てくれと懇願したので、彼は根負けして山を下りて行つしまつた。私も強くすすめられたけれど、一人だけでも残る決心であつた。眼はボロボロになつていたし、ひげも髪も伸び放題になつていた。

それからしばらくすると、こんどは私の母が説得に來た。母が言ふには、住民は殆んど久志に集まつていて、すでに町長なども任命されで街のようになつてしまつてゐることであった。もう在郷軍人会長だからといって、殺される氣遣いはないようだから、一日も早く捕虜になつて久志へ来てくれ、と頼み込んで母は一人で帰つて行つた。それから間もなく、ついに私も山を下りて久志へ行くことになつた。

備瀬 久志に着いたものの、すぐにテントの奪い合いが始まつた。今帰仁の人々が本部のテントを奪おうとしたので、本部出身には本部の人のテントがあつてもいいではないか、などといつて大喧嘩をしたものであつた。

金城 それからしばらくすると、茅刈り作業に狩り出された。たくさんの男女が一緒に行き、前後にはちゃんとMPがついていたけれど、突然米兵たちが現われて誰彼のみさかいもなくかつさらつて行くこともあつたのだから、作業に出るのも命がけであった。

それとは別に、LSTから荷物を運ぶ作業もあつたので、私は姉と一緒にいつも作業に出ていた。作業に出さえすれば、オニギリと一緒にいつも作業に出ていた。作業に出さえすれば、オニギリと一緒にいつも作業に出ていた。

麦藁帽子）を被つていたが、米兵たちが横で指差しながら、こいつは女性だと笑つてゐるのが聞こえた。私たちと一緒に捕まつたある老婆のごときは、突然米兵に出会つたのですつかり仰天して、膝をつき両手を上げたり下げたりしながら、いつまでも命乞いを続けているものである。

しばらくすると、米兵たちが饅詰やお菓子などを配つていたけれど、毒が入つてゐるといつて、誰もそれを食べようとはしなかつた。

しばらくすると、米兵たちが饅詰やお菓子などを配つていたけれど、毒が入つてゐるといつて、誰もそれを食べようとはしなかつた。

金城 避難している間に、カーミグワバンタという所で二人射殺されたことがあつた。壕に入つたり出たりするのを米兵に見つかってしまつて、ねらい撃ちされたのであつた。私たちもすぐ上の方でその銃声を聞いていたが、それ以後は軍服などを着ていると殺されるといって、私の父などもウバサージン（芭蕉布の着物）を着て歩くようになつた。

久志収容所の頃

金城 旧暦の五月十五日に兼次に集結してそこに一泊して翌日には久志の大浦に連れて行かれた。住民たちは、今帰仁から船で沖へ運んで海中に投げ捨てるそだ、などといつて大声で泣いていたものである。

宮城 私も兼次で家族を見送つたけれど、在郷軍人会長といふ立場上、おめおめと捕虜になるわけにはいなかつた。だから再びウツチントウの山に登つたが、その途中で片足を失つた傷だらけの男に出会つた。助けてくれと懇願されたけれど、それを振り切つてもと

味噌汁にありつくことができたし、それだけでも口べらしになつたからである。また、看護婦の経験者は病院で働くようにといふことだつたけれど、私はアメリカーたちと一緒に働く気にはなれなかつたので、そこへは行かなかつた。

とにかく久志という所は禿山ばかりだつた。本部にはヨモギぐらいはあつたけれど、久志にはすでにそれさえなかつた。だから、桑の葉や海の藻など、食べられるものは何でも食べた。

宮城 ひどい食糧難が続き、栄養失調で倒れる者も続出した。だから元気のある者はみんな本部まで食糧を取りに來た。當時、それは「越境」と呼ばれていたが、重い荷物を担いで三五キロから四〇キロも行列をなして通つたものであつた。その苦労はたいへんなもので、久志に着くと三日ぐらいは歩く気もしなかつたほどである。ところが、久志の入口にはCP（民間の臨時警官）が待ち構えていて、せっかく運んで來た食糧を没収することもあつた。二度も三度も被書をこうむつた人々もいたので、私たちはそいつらを「島巡査グヮ（CPの蔑称）と呼んで、その理不尽な行為を憎んでいた。

それから、その食糧運搬のさいに米兵に襲われた婦人がたくさんいた。男たちと一緒に歩いていても、男装で薄汚い格好をしていても、手あたり次第に奪い去るのであった。男がたくさんいても、武器を所持している連中に反抗できるわけがなかつたので、そのつど泣寝入りするよりしかたがなかつた。だから、あとになると女性は殆んど食糧を取りに來なくなつたし、男たちもわざわざ暗くなつてから山道を通るようになつた。

そして明治山まで来ると、道端に突然敗残兵が現われ、熱心に恵みを乞うのであった。氣の毒になつて分けてやることもあつたけれど、時にはついムカッとなり、我々にだつて帰りを待ちわびている妻子があるんだ、栄養失調氣味の子供たちがいるんだぞ、などとどなりつけて断ることもあつた。

とにかくたいへんな食糧難で、食いつなぐだけでせいいっぱいであつたが、やがて私は、嘉数村長（戦時中の本部村長）の指示で労務班長になつた。港で荷役の人夫たちを監督する仕事であつた。そこで米軍は、人夫を駆り立てて深夜まで働かせ、疲労と空腹のため少しでも能率が落ちたとみるや、たちまち「班長！班長！早く！」とせきたてるのであつた。

戦時生活

本部町谷茶 仲宗根 千代（二二歳）

ついに本部へ帰る

金城 久志ではさんざん苦労したけれど、その年の十一月になつてようやく本部に帰れるようになつた。浜元の人々は一時は山里にいたが、間もなく村に下りて来て住み始めた。宮城 堀村命令が出たので、本部に帰つて来たが、街中が焼野原になつていたので、東・渡久地・谷茶の人々は殆んど並里に集まつて来て、みんなで資材を切り出してテント小屋を作つて住んでいた。また役所もそこにあつたので、食糧も配給されていた。

備瀬 その頃浜元に軍病院があつたので、間もなく金城さんと私はそこで看護婦として勤めることになつた。だがある日の夕方、二人で浜元から渡久地に向かつて帰つて来る途中、トラックに乗つた米兵たちとぶつかってしまった。米兵たちが車を止めて私たちに近づいていた。

田井等の金網の中にいて
米軍が上陸して來たので、しばらくは逃げ隠れしていたが、やがて空からビラが落ちて来て、みんな所定の場所に集まるように呼びかけて來た。それを読んでおそかれ早かれ捕虜になるものと覚悟をしていて、突然米兵が銃をつきつけながら家中に踏み込んで來た時も、たいして驚かなかつた。抵抗をしないようなそぶりを示そう、できるだけ気を落ち着けよう、と自分に言い聞かせながら黙つて両手を上げたのであつた。

下の三叉路に集合させられた。そしてそこからトラックに乗せられて、羽地の田井等の金網の中にぶち込まれてしまつた。テントの中には敷物など何もなく、すぐ地べたであった。私は行列に並んでオニギリをもらつたが、私はそれを食べながら主人の安否を気遣つて泣き続けていた。主人はまだ山の中に隠れているというのに、まだ山に残つてゐる者は全部殺されるらしい、といふ噂が流れていたからである。だが、やがて私は伊豆味の地理にくわしい人に頼み込んで、一緒に主人の隠れている所へ行くことになつた。そしてそこで大声で主人の名前を呼び続いていると、ちよう

いて來たので、二人ともすつかりおびえて色を失つてしまつた。強姦事件の噂をたくさん聞いていたし、もう逃げも隠れもできなかつたからである。それでも軍病院の看護婦だと分れば許してもらえるものと、必死の思いで「ホスピタル、ホスピタル」を連発したものであつた。そこへ運良くMの車が通りかかったので、どうやら無事にすんだものの、あの時の恐怖は今でも昨日のことのように覚えている。

牛小屋で商売繁昌

十・十空襲で谷茶は一面の焼野原と化したので、私たちはしばらくは知人の壕に同居させてもらつていて、間もなく、衣類と鍋と釜だけを持って、伊豆味の山に避難することにした。

当時、私たちはまだ結婚したばかりで、適当な家もなかつたので農家の牛小屋を借りて、まず柱や壁に付着している糞を洗い落とし、床もちゃんと敷いて、どうやら生活を始めることができた。だが、渡久地や谷茶から来た他の避難民たちは、殆んど生活に困つていて、とくに子供をたくさんかかえている家庭では、三度三度の食事さえ満足にできず、農家で日雇などをしているありますであつた。

さういわい私たちは、お金をいくらか持つていたので、付近の農家どそを通りかかった米兵たちに再び捕まえられてしまった。だがそれでもあきらめずに、こんどは夜中に出掛け行つて、ついに主人を連れて來た。するとものの一分もたたないうちに米兵が現われ、「ユーバンゴウ、ユーバンゴウ」と叫びながら、主人を連れ去つてしまつた。番号を見せなさい、ということだったが、所持していなかつたので、カンパンへ連行されたのであつた。

他の男たちはひげも伸び放題に伸ばして、年齢などを偽つていたが、私の主人はひげもあまり生えていなかつたので、兵隊だと疑われてひどい目に会つたとのことであつた。

再び商売を始める

羽地から帰つてもすぐには谷茶に戻れなかつたので、私たちはしばらくは崎本部の学校のテント小屋にいた。その頃、谷茶や浜崎には米軍の兵舎や倉庫が立ち並んでいたからである。谷茶や東の人々は殆んど並里のテント小屋にいた。

だが、しばらくすると、また商売ができるようになったので、こゝは警戒の行商を始めたことにした。しかし、どういうわけかそれが禁止になつて、谷茶のブローカーが全部検査されたことがあつた。それでも食べていくためにはそれしかなかつたので、ひそかに行商を続けていたが、あつちの村でもこつちの村でも大歓迎であつた。

収容所

本部町伊野波 伊是名 静子（二十一歳）

久志にいた頃

私たちは山から下りると、今帰仁から久志へひっぱられて行つた。主人は戦地へ行つていたし、三歳の娘と母と私の三人だけだったので、本部へ食糧を取りに帰ることもできなかつた。一度だけ、母が帰つたことがあつたけれど、途中で黒人兵に追いまわされてひどい目に会つたこともあつて、暴行はされなかつたけれど、それ以来どうしても帰そうとしなかつた。時には実家の父が訪ねて来て、少しずつ分けてくれたけれど、久志にいた数か月の間、殆んど配給だけで過ごさなくてはならなかつた。

当時は女性にとっては死よりも強姦の方がこわかつた。男は墨丸を切つて戦車でひき殺し、女性は強姦されるという宣伝が流されていたし、事実、ここでも親の目の前でやられた人もいたので、若い女性はとくに注意せねばならなかつたのである。たとえ奪い去られても、目の前で襲われようとも、なにしる男たちは近寄ることもできなかつたし、見て見ぬふりをするよりしかたがなかつた。

女性を追っかける米兵たち

久志から帰つて來たものの、家は全部焼かれて何も残つていなかつた。この一帯はたくさんテント小屋が並んでいたが、そこへアメリカ人が突然現われたりすると、みんなでドラム鑼などをガンガン

資材の供出

私の家族は、戦前、フィリピンのダバオに十九年間もいて、二七町歩の土地に麻を栽培していたが、一九四一年に全部一緒に引き揚げて來た。そのためにかろうじて生き延びることができたけれど、そのまま向うにとどまつて亡くなつた人が多く、なかには一家全滅という例もある。

ともあれ、帰郷後、私は村役所の林務技手に命ぜられた。当時は木炭の供出などもあつたが、戦況が悪化するにつれて、もっぱら軍向けの資材を検収する役員となつた。宇土部隊が陣地構築のための資材を大量に要求していたので、伊豆味では伐採隊を組んで連日資材を切り出していたのである。軍が指定した山は、私有林でも文句もいえず、とにかく資材を供出せねばならなかつた。そのほかにも、軍馬の世話をする係などもいたし、壕掘りなどの人夫として狩り出された人々もたくさんいた。また、作業中にちょっとでもぼやぼやしたりすると、いきなり飛んで来てぶん殴られたりしたものであつた。

慰安婦と朝鮮人軍夫たち

宇土大佐は嘉教村長の家に寄宿していただけれど、なにしろ評判の悪い隊長であった。民間の適當な家に女性を何人も囲つて、ほとんどの毎日のように酒色に耽つていた。またそのほかにも、兵隊たちのための慰安所もちゃんとあつたし、将校はまた将校専用の慰安所に通うといったありさまで、閑静な伊豆味の村が、すつかり殺伐たる兵隊の町に変貌を遂げてしまつてゐた。慰安婦たちは殆んど那頃の

呻いて迫つ払つたものであつた。

ある日、私たちは女だけで数人一緒にここからお茶へ出掛けた。途中で四人の米兵が私たちに近づいて来て、いきなり前後から私たちを挟み、私たちのなかの一一番若い娘を連れ去ろうとした。そこで私の母が、言葉は分らないながらも、大きな声で「渡久地 渡久地」と叫びながら、渡久地へ行くのだといつて指さした。ところがその方向にたまたま私がいるので、米兵たちは、その娘はまだ若いからこっちはしないとでも感違いしたらしく、こんどは私をつかまえて山の中にひきずり込もうとした。私は大きなザルを頭に乗せていたが、米兵たちが乱暴をしようとしたので、私の母や一緒に来た人たちが全部で私にすがりついて來た。

私はもうその時は死ぬのもこわいとは思わなくなつてゐた。そこで「私一人死んだらいいんだから何も騒ぐことはない。騒いだら全部やられるから」とみんなに言つた。そして、「どうせ死ぬぐらいならさういに死のう」と着物をなおしていると、私の母が「この娘をどうするつもりなのだ」と大声で泣きわめきながら、米兵たちにすがりついて行つた。すると、さすがの米兵たちも氣を呑まれて、私をつかんでいた手を離したので、いつたんは死を覚悟した私であつたが、頭に乗せていたザルをおもいきり放り投げ、後も見ずに一目散に逃げ、どうやら難をのがれることができた。

日本兵による虐殺

本部町伊豆味 照屋 忠次郎（四五歳）

辻遊廓から連れて來られたジュリグワ（遊女）たちであつた。

また渡久地には數十人の朝鮮人軍夫が來ていて、村役所の前を通つて行くのをしばしば見かけたことがあつた。軍夫たちは、ごく些細なことでもなんくせをつけられて殴り倒されていた。牛馬にもひときい扱いを受けて男泣きに泣きじやくついた光景は、いまも忘れることができない。軍夫たちは昼休み時間になると、トウガランをもらうために民家を訪れるのであつたが、一、二分でも作業に遅れると、それこそ半殺しの目に会うのであつた。

ところで、やがて私も伊江島へ行けという徵用命令の赤札が來た。伊江島には二週間いたが、壕掘りや土運搬などをさせられた。荷馬車を引いている人々もたくさんいた。だが間もなく、すぐ伊豆味へ帰れという命令を受けた。伊豆味ではせつかく伐採した資材を検収する係がいなくて、軍としても困つてゐたのであつた。だから、伊豆味に帰ると、軍用の資材が山と積まれていて、私は前にもまして多忙をきわめた。

十・十空襲

十・十空襲の日は、私は宿直で村役所にいたけれど、早朝からボンボンと大砲を打ち上げるような騒々しい音が聞こえて來たので、谷茶に据えつけられたばかりの砲台で、発射テストを始めたのだとばかり思つてゐた。ところがその時は、もうすでに伊江島は激しい空襲に見舞われていたのであつた。そして間もなく渡久地の街も猛烈な爆撃を浴び、一面の火の海と化してしまつた。その日の空襲で街中が焼野原となり、役所も焼けてしまつたので、それ以後は並里の壕

で事務をとるようになつたし、各村間の連絡も伝令で行なうようになつた。

空襲から逃がれて伊豆味に帰り着くと、家族はみんなイシミジ山に避難していた。しばらくそこにいて、四、五日してから伊豆味に戻り、村の近くに壕を掘つた。

当時は国民貯蓄も強制であったが、それも空襲で残らず焼けてしまつたし、子供らの生命保険など三種類の保険があつたが、何一つ残つていなかつた。また、米などの食糧もすっかり焼きつくされてしまつていた。

照屋忠英虐殺事件の前後

年が明けていよいよ艦砲が激しくなってきたので、私たちの家族はイシンバ山に避難した。そこは町有林で、広くて深い山だつたので、防衛隊の連中や本部一帯の避難民が密集していた。危険が一刻と迫つて来たので、よそに移動しようと思つて家族をせきたてたが、その方が安全だといつて誰も賛成してくれず、とくにすつかり臆病になつていた父は、どうしてもそこを動こうとなかつた。やがて、そこは猛烈な艦砲射撃を浴びた。まず、叔父が艦砲の破片でやられて即死し、父も足に重傷を負つてしまつた。その日は朝の八時頃から一日中艦砲射撃が続き、付近の避難民はわれ先に今帰仁の山へ逃げ去つてしまつた。だが私たちは、重傷の父を残してもはや立ち去るわけにもいかなかつた。父の出血があまりにもひどかつたので、足を天井につるしたり、木炭でお湯を沸かして傷口を洗い続けたけれど、その甲斐もなく父は十日後には死んでしまつた。

重傷の父を前にして、もうこうなつたらあきらめて全部ここで死んだ方がいい、一家一個所で全滅するのも時間の問題だと、絶望的な気持になつてゐたが、そこへいとこの忠英が訪ねて来て、一緒に逃げようではないかとしきりに誘つてくれた。だが、「重傷のおやじを置いて行くわけにはいかない」と断ると、さらに「それじゃ一人だけ跡取りを残しなさい。跡取りだけでも私たちと同行させなさい」と言つてゐた。しかし私は、どうせ死ぬなら子供たちも全部一緒にそこにとどめておくことにした。忠英というのは、当時、本部国民学校の校長だったが、山の中をさまよい歩いているうちに日本軍に捕まえられ、スペイ呼ばわりされたあげくに斬殺された照屋忠英のことである。

猛烈な艦砲の中で、「殺してしまえ。こいつ一人のためにみんながやられるから早くこいつを殺せ」と、兵隊たちが怒声を浴びせているのを、恐怖におびえながらもちやんと聞いていた村人たちがいた。忠英は耳がかなり遠くて、飛行機の音すら聞くことができないほどであつたが、私たちと別れながら、ずっと山の中をさまよい統けていたらしく、大きな声で兄の忠助や私の名を呼んでいたのが聞こえたと、伝えてくれた人々もいたし、また、日本軍に斬られてからも、私たちの名を呼び続けていたと、村の人々は教えてくれた。忠英が斬殺されたカシンナー山は、私たちの隠れていたイシンバ山からは、ほんのわずかの距離にあり、小さな森によつて隔てられているだけであつたが、艦砲射撃があまりにも激しく、空には偵察機が旋回し続けていたので、私は一步も外へ出ることができなかつた。

砲撃が止んだのはそれから数日後のことであつた。そこで私は、腹ばいになつたりしながら、ようやく忠英が斬殺された場所へ辿り着いた。忠英は国民服を着たまま倒れていた。暑いさかりに数日間も放置されていたので、ものすごい死臭が漂つていた。そこへ兄の忠助たちもやつて来たので、私たちは脚綱と足袋をつかまえてムシロに乗せ、遠くに運ぶことはできなかつたので、とりあえずそこに埋めておくことにした。その時はすでに、忠英の妻も破片でやられて死んでしまつていた。忠英は妻の死も知らずに斬殺されたのであつた。

食糧強奪に来た敗残兵

それから間もなく、私たちはイシミジ山に移つた。そこで私は、死んだ父のために形だけの仏壇を作り、木片でこしらえた位牌を安置し、生前父が好きだった煙草を供えていた。

そこへある晩、五名の部下をひき連れた敗残兵が突然現われた。そしていきなり、「私は運天から来た者だ。きさまらがスパイをしてたために日本は負けてしまった。外へ出ろ。斬り殺してやる」とどなりながら、軍刀をチャラチャラさせていた。小屋の中では家内も子供たちも恐怖におひえていた。ちょうどそこに居合せた友人と二人は、あきらめて言われたとおりに外に出た。するとところは、「

家に血が飛ぶからもと離れて立て」と怒声を浴びせられたりしたが、もはや私は、怒りも恐怖感もなく、ただ目をぶつけて立つていた。だが、兵隊たちは軍刀をチャラチャラさせていたが、ついに私た

山中避難

本部町伊豆味 太田マツ（五一歳）

今帰仁の山に逃げる

く逃げた方がいいとせきたてられて、私たちはカラガーラの山の奥地に隠れていた。間もなく食糧がなくなり、艦砲の下をくぐって探しに行かなくてはならなくなつた。真部山に友軍の倉庫があつたので、たとえ三合でも五合でもいいから米を分けてくれと願い出たことがある。長男は護郷隊にとられだし、女だけの世帯で食べていくつも困っているからぜひとと頼み込んだけれど、軍側は、まず首里、那覇からやつて来た避難民に配給して、余ったら分けてあげるつもりだと言つていた。ところが、その晩に食糧倉庫が焼けて、そこに積まれていた米は全部なくなってしまった。

やがて真部山周辺が激戦地となつたので、私たちも今鼎仁の山に逃がることにした。途中には艦砲などでやられた死体がたくさん転がっていた。やつと今鼎仁の山に辿り着いた私たちは、まず大きな墓をこじあけてその中に隠れた。米は一合もなかつたので、夜の間に付近の畑から芋を掘つて來たり、田畠の草などを摘んで来て食べた。ノミやシラミもたくさん湧いて、着物の縫い目にびっしりとつまつてしまつたし、こんなにシラミやノミが出るようでは戦争はもう負けたも同然だね、などと話し合つていたものである。

死体処理の光景

間もなくその墓も危険になつたので、別の岩穴を見つけて隠れていたけれど、ある時、さきに捕虜となつてゐた一人の青年がやって来て、「みんなもそんな所に隠れているより、早く出て来た方がいい。私はアメリカに捕まつたが、別に悪いことはしない。だから安心して早く出ていらっしゃい」としきりに呼びかけていた。私は

といつて、みんなで大騒ぎをしていたこともあつた。
それから伊豆味に帰るまで、私たちはすつと同じ豚舎で過ごしてゐたが、そこでマラリアが流行して、息子もそれで高熱が続いて苦しんだことがあつたが、どうにか一命はとりとめることができた。

蘇鉄を食べて

もう村に帰つてもいいということで伊豆味に戻つて來たけれど、家も焼けてなくなつてゐたので、学校の運動場に孤立小屋を作つてみんなで一緒に住んでいた。そこでもマラリアが流行してたくさんの人々が亡くなつた。私の友人の中にも、家族を四、五人も亡くした人がいたし、家族の中から三、四人ぐらい亡くなつた家はかなりあつた。間もなく、山から材料を切り出して來て、それぞれの家を建てて住むようになつたので、私たちも小さな茅葺きの小屋を作つて住むことになった。

敗残兵の略奪行為（座談会）

本部町伊豆味 饒平名(ア)	ウト(A) (四十六歳)
渡口カメ	(四十歳)
饒平名(イ)	ウト(B) (四十歳)

下山勧告

饒平名(イ) 米軍が上陸する直前に、私たちは山奥のタキントウという所に壕を掘つて避難していた。すぐ近くに友軍の陣地があつたし

ちも、どうせ死ぬなら、生れて育つた村に帰つてから死にたいと思つていた矢先のことだったので、みんなそこのから出て、その青年について川沿いに伊豆味へ戻つて來たのであつた。

村に着いてみると、兵隊も民間人もかなり亡くなつていて。道路にも屋敷にも死体がゴロゴロ転がつていて、それらを片づける時の光景たるや、あたかも動物の死体でも処理しているかのようであつた。家も殆んど燃けていたので、私たちは木の根っこなどで一夜を過ごさなくてはならなかつた。

豚舎に過ごした日々

翌日、私たちは羽地の田井等へ連れて行かれた。やがて伊豆味の人々は、殆んどそこから仲居次へ行つてしまつたが、私たちは田井等にとどまることにした。そして、農家の豚舎を掃除し、そこにはますなどを敷いて住むことになった。間もなくそこへ、護郷隊に行つた息子が無事に戻つて來てくれた。息子は毎日のように、さつま芋のかずらや田畠の草などを摘んで來てくれたので、私たちはそれを食べて過ごしていた。

また、時には伊豆味へ食糧を取りに帰つたりしたが、ある時、途中の山の中で黒人兵にぶつかつたことがあつた。私たちは女ばかり数人一緒にあつたが、顔を見ないで早く歩こう、早く歩けなどと声をかけ合いながら歩き続けた。生きた心地もしなかつたが、黒人たちは何もせずに私たちを通してくれたので助かつた。あの時は、若い女たちもいたので、かばうに大変だつた。事実、羽地の近くの山の中で強姦された人もいたし、また、アメリカに連れて行かれた

渡口 そこには大浜や渡久地の人々もたくさんいた。艦砲射撃が止み、激しい銃撃戦が済んで、しばらく大雨が降り続いていた。そこへ米兵が現われ、「雨に濡れて子供たちも可哀相だから、一刻も早く山から下りなさい」と繰り返し呼びかけていた。

饒平名(ア) いよいよ最後の時が來たということで私が身支度をしていると、どうせ死ぬのにきれいな着物を着ても無駄だと捨鉢などと言う人々もいたが、私は、死ぬ時ぐらいはちゃんとした衣装を着て死にたいと思ったので、ありつたけの衣装を着用して、みんなにも着せてやつたものだつた。

饒平名(イ) 外ではなおも「出てこい、出てこい、殺しはせん」と勧告し続けていたので、ついに私が先頭に立つて壕から出ることになつた。そして銃をつけられ、お金などの所持品は残らず没収されてしまった。

渡口 山から下りてからは、恐くてめいめいの家にはおれなかつたので、みんなで一緒に饒平名(ア)さんの家にいた。だから彼女の家は、芭蕉の間にも豚小屋にも避難民がいっぱいあふれていた。

饒平名(イ) 宇土部隊は、いつの間にか撤退していたが、やがて、部隊からはぐれた敗残兵たちが、家から家へ夜毎に現われ、私たちが米軍の陣地から狙いで來た罐詰などを掠奪するようになつた。

住民を威嚇する敗残兵

饒平名(A) 食糧が足りなくて、米軍の陣地から饅頭を狙いで来たりして、どうやら食いつないでいたけれど、それが敗残兵に見咎められてひどい目に会った。

家のまわりに饅頭の空カンが散乱しているのを見て敗残兵たちは、「お前らが食べたんだろう」とえらい剣幕でどなつたり、家中に上がり込んで食糧を物色するのであったが、私たちにとっては、本当にアメリカよりもこのような友軍のほうがはるかに恐かった。

饒平名(B) 私たちも、ほんのわずかに懸し持っていた米などを全部かっぽられた。私は戦時に主人が病死したので、一人で子供たちを育てなくてはならなかつたが、敗残兵たちはそんな私の家にも夜毎にやって来て、「何かないか。家にあるものは全部出せ」と強迫した。その時の敗残兵たちの言動は、アメリカーよりもずっと恐かつた。それでも勇を鼓して「もう全部出したので何も残っていないせん」と言うと、「それじゃ家中を調べるぞ」といつて、土足で上り込んで家じゅうをひっかきまわすのであった。

饒平名(A)はじめのうちは氣の毒だ可哀想だと思つて、煙草や黒砂糖なども上げていたが、そのうちに、「供出しなければ撃ち殺すぞ」と威嚇するようになつた。それで私もたまりかねて、「煙草も砂糖もあるだけしかないよ。全部奪われてしまつて何も残つていなによ。あると思うなら自分たちで探してみなさい」と言つてやつたことがあつた。

饒平名(B)そしてついに彼等は、「あなた方はアメリカよりも友軍のほうが恐いんだろう」とさえ言い出す始末であつた。そこで私ものほうが恐いんだろう」とさえ言い出す始末であつた。そこで私も

「うん友軍のほうが恐いよ」と言い返したものであつた。

私たちは、戦争の直前までずっと遠くの辺名地へ稼掘りに狩り出されだし、また茅や野菜などを供出したりして、友軍のためにあれほどつくしたのに、主人たちも従軍して頑張つたのに、あんな仕打ちを受けるとは考えてもみなかつた。

饒平名(A)あまりの恐さにとうとうそこにはおれないといつて、間もなくみんなで羽地へ移ることになった。その頃私は臨月で、自分の家でお産をするつもりだったので、みんなが羽地に行つたあともそこに残つていたが、そこへしばしば米兵たちがやって来て、とても親切してくれた。

だが、夜になると敗残兵が来て、恐くてとてもいられなくなつた

ので、ついに私も羽地へ行くことになつた。羽地では田井等から仲尾次に移つたが、敗残兵におどされる心配もなくなり、はじめて生き返つたような気持になつた。

徵用で伊江島へ

本部町 我那霸 宗 盛(二八歳)

十・十空襲の前に、私は徵用で約一か月間、伊江島へ行つていった。現在の伊江島中学校付近から飛行場まで、土や砂利を運搬したり、石を敷きつめたりする作業が、早朝から晩は暗くなるまで続けられた。

私たちは、伊江島に着くと同時に班編成が行なわれたが、各班に

は班長というのがいて、何回となく「氣合」を入れられた。班長は、氣に入らぬことがあれば、すぐに全員を整列させて、力まかせに殴りつけるのであつた。あまりの痛さに、二、三日ぐらゐ食事も取れない状態が続いたりしたので、みんなで申し合わせて、要求をつきつけて、ついに班長を交替させたこともあつた。

乳香児に無慈悲な人々
徵用から帰ると、私は、防衛召集を免れて警防團に属し、連絡係として各字に伝令を出す任務についた。
十・十空襲の日は、早朝から高射砲がとどろき、瞬時に輸送船が燃え上がり、渡久地の町並もすっかり焼き払われた。

また、米軍が上陸した時、私たちの近くに陣地を構えていた日本軍は、陣地を発見されて応戦したが、ほんの数時間で全滅してしまつた。その日の戦闘では、米兵も何人か死んだが、翌日には、死体がちゃんと収容されていた。

その頃、私の家族は、本部富士の中腹の岩穴に、他の多くの人々と一緒に隠れていたけれど、乳香児をかかえていたので、みんなからひどいやがられた。一緒にいた人々は、赤ちゃんが泣き出したり、「この子のためにみんなが危いから、すぐに殺しなさい」と強要するのであつた。だから、私の家内ともう一人の子持ちは、みんなから離れて、高い崖の上の岩穴に隠れなくてはならなかつた。彼女らは、乳香児をかかえて、屋中はずつとそこに隠れていたので、私は毎日、芋をふかしてそこへ届けたものであつた。

このように、屋中は岩穴に潜み、夜になると村へ下りて来て、芋

を掘つたり、貝を探つたりする日々が、數十日も続いた。

家族と別れて

やがて、米軍によつて下山勧告のビラが大量にばら撒かれた。それには「不自由な生活を続けるよりも、村に帰つて平和な生活を始めた方が賢明である。アメリカ軍は、民間人に危害を加えるようなことはしない」という趣旨のことが書き連らねられていた。それは、艦砲に怯え、銃弾に追いまくられて来た人々の間に、またく間に広まつた。そして「早く下山しないと掃蕩戦でやられるぞ」という警告に接した時、人々は遂に捕虜となつて下山することを決意した。

だが私は、兵隊とまちがえられる危険性があると判断して、家族と別れて一人で岩穴に隠れていふことにした。付近にも、おそらく私と同じ考え方からであつたろう、家族と別れて隠れている男たちが何人かいた。

そんなある日、山から下りて畑で麦刈りをしていた男が、米兵に射殺されるという事件が起つた。目撃者らの証言によれば、ちょっと離れた丘の上にいた二人の米兵が、くだんの農夫を指さしながら、ねらいをつけて一発で撃ち殺した、ということであつた。

それからしばらくして、私の母が、久志からはるばる私を連れにやつて來た母は、山の麓で私が死体となつて転がつてゐる夢を見つて、居ても立つてもいられずに食糧を運びに來た男たちについて來たのであつた。私は、そうした母の熱心な説得に負けて、遂に下山して、久志へ行くこととなつたのである。

砲火を逃がれて

本部町浦崎 玉城尚一（四七歳）

米軍が上陸した日は、午前六時頃に自転車で伝令が来て、米軍が上陸して来るから直ちに避難せよ、ということだったので、私たちも急いで大堂の壕に隠れた。それ以来、昼間はそこに隠れて、夜になると村の煙へ出掛け行って食糧を担いで来るようになつた。

だがある日、米軍の猛烈な迫撃砲を浴びて山火事が起り、壕の近くまで火の手が迫つて來たので、慌ててそこから出て、山の頂上付近に逃がれたことがあつた。さいわい、若い人々によつて火は消し止められ、私たちの壕も焼け残つたので、なおしばらくそこに隠れしていることにした。

そんなある日、すでに真部山は占領されていて、間もなく米軍がこっちへ押し寄せてくるにちがいない、という情報が伝わつて來たので、私たちは、わずかばかりの食糧を持って、クルナミ川にまぎれ込んだ。そこには、本部から來た人々と今帰仁方面から逃げて來た人々が數千人もいて、足の踏み場もないくらいごった返していった。さいわい、その川はこんもりと茂つた樹木でおおわれていたので、飛行機からは中のようすは見えないようであった。だが、私たち、どうせ死ぬなら、右往左往している人混みの中で死ぬよりは、自分たちの墓で死んだ方がましだ、と思つたので、村の近くのシキンカの壕へ引き返すこととした。

村も占領軍の天下と化して

やがて、村へ帰れるということになつたので、浦崎の人々は、まず設営隊を送つて、吉島の上に掘立小舎を作つてから、みんな一緒に引き揚げて来て、そこに二ヶ月ぐらいた。そこに来てからも、栄養失調のために何人かの年寄たちが亡くなつてしまつた。

その後、村に帰つたとはいふものの、村の半分、すなわち道路から海側へは行けなかつたし、県道を押し広げて大きな道路が通されていた。私たちの屋敷も、戦前は二〇〇坪もあつたが、その三分の一は道路と化していた。だから、私たちは他の人々のように自分の屋敷に移ることができず、さらに二ヶ月ぐらい、村はずれの谷間にテント小舎を建てて、不自由な生活を続けなくてはならなかつた。

それから間もなく、自分の屋敷の隅に二間四方の茅葺き小屋を作つて住むようになったが、家の前の十字路に米兵ボックスがあり、いつもアメリカーがそこに詰めていたので、不安な毎日であった。当時なお、若い青年男女は、アメリカーを警戒して、木の上に隠れたり、土を掘つてその中に隠れたりしなくてはならなかつたからで

それからしばらくたつたある日、一人の男がやつて來て「みなさんそこにいることとても危険です。もしアメリカーに出会つたら、みんな手を上げて一緒に壕から出てください。彼等は何もしないから早く山から下りなさい」と説得して帰つたので、間もなく、その付近にいた村の人々は、全部山から下りることになった。

久志での生活

捕虜になつた私たちは、久志の山の中に連れて行かれたが、着いてみると、テントも何もない場所で、ワラビのほかには何も生えていない禿山であった。だが、さいわい好天が続いたので、私たちはみんなで山から資材を切り出し、薪を刈り集めて、辛うじて雨露を凌げるだけの掘立小舎を作つて住むようになった。ムシロを持つていない人々は、ワラビを刈りて来てじかにその上に寝ていた。そして、天気の好い日にそれを出して干したものだったが、その光景たるや、あたかも畜舎の堆肥のごとき感があった。だが、すでにそのワラビすらもなくなつていて、人々はやむをえず、それを干して再び使用せねばならなかつたのである。

その後、米軍に勤めていた私のいとこが、わざわざ戸板を数枚持つて来てくれたので、その上に寝ることができるようになり、はじめて人間らしい生活を取り戻すことができた。

また、久志では、はじめの間は一人一日三合ずつの配給があつたが、私たちは、それにユーナの葉や桑の葉や海の藻などをまぜて食べてていた。また野菜のかわりにそれらをおつゆに入れて食べることもあつたし、田圃の草も食べたが、変なにおいがして、なかなか喉のつど娘たちをかくまうために、いつも戦々恐々としていた。

私の戦争体験

本部町謝花仲間晴子（十八歳）

から落ちなかつた。

だが、間もなく配給量は半分に減らされてしまった。村毎に責任者がいて人数を申告していたのだが、殆んどの村が水まし申告をしているということで、配給を厳正にするために再度人口の整理が行なわれたからである。浦崎も倍ぐらいにして申告されていたので

その後は、一人一日一合五勺から二合ぐらいになり、食生活はますます苦しくなつた。

ある。

私も若い娘が二人いたので、しばしば米兵が現われたが、ある日、一人のアメリカーが来て、さも得意そうに腕の階級章を見るといわれた。たしか少尉だったが、要するに、彼に娘をくれといふりであつた。私が二人とも学校の先生だから駄目だとつぱねたので、彼は不服そうであったが、おとなしく帰つて行き、二度と現われなかつた。それでも下級の連中はしばしばやって來たので、そつと娘たちをかくまうために、いつも戦々恐々としていた。

艦砲に命を奪われた人々

謝花の人々も、殆んど大堂へ避難することになつていて。そこにはヘーシチガマという大きな壕があり、その周辺にはうつ蒼と樹木が茂つていた。私たちは、艦砲射撃が激しくなつてからその壕に移つたが、避難民がどつた返していたために、米軍に見つかつてしまつて、たちまち集中砲火を浴びせられた。

乱れ飛ぶ艦砲射撃の中で、大声をはり上げて避難民を誘導していた駐在の巡査が、壕の入口で直撃を受けて死んだのもその時のことであった。また、その一帯には、當時、伊江島の避難民がたくさんいたが、その中に壕へ移る途中で、艦砲に首を飛ばされた婦人もいた。その人の夫が、私たちの壕へあわただしく駆け込んで来て、

「家内がやられた」といつて呆然と佇んでいた光景は、今なお脳裏に焼き付いている。壕の中に居合せた大人たち、「亡くなつた方は、みんなのために厄払いをしてくれたんだ」などと慰め合つていた。だが、それから数日の間に、さらに何人かの人々があいついで亡くなつてしまつた。

岩場に身を隠す女子青年たち

米軍が上陸してから間もなく、年寄たちは、山に隠れているかえつて危いからということで、一人ひとり村へ下りて行つた。だが、私たち女子青年は、米兵から身を護らねばならなかつたので、本部富士の中腹の岩場に、みんなで一緒に隠れていた。リュックサックに食糧をいっぱい詰めて、雨が降つたら岩の下にもぐり、天気が好くなると岩場に出て、シラミを取り合つたものである。殆んどが十六歳から二十六、七歳の女性であつた。

そこからは、アメリカの艦船が手に取るよう見えたし、はるか下の方で銃を狙いで歩いている米兵らの姿も見えた。夜になると米兵らは引き揚げたので、私たちも暗くなつてから、こつそり村に帰るのがつねであった。このように、昼の間はずつと岩場に隠れていたので、謝花では強姦事件などは一度も起こらなかつた。

大浦での食糧難

間もなく私たちも、捕虜として久志の大浦に連れて行かれた。そこは、見渡すかぎりの禿山であつたが、食糧難が続き、栄養失調やマラリアのために倒れる者が続出した。私たちも、ワラビの芽やツ

供のように喜んでくれたものであつた。

非常召集

本部町備瀬 比嘉忠勇（四一歳）

一九四五年（昭和二十一年）三月、私たち四五歳以下の男子は、ついに非常召集で狩り出された。本部の村役所に該当者三〇〇人ぐらいいが集まつて、まずそこに一泊し、翌日、名護の三中に行き、そこにもう一晩泊まり、さらに恩納にも一泊して、ようやく嘉手納の飛行場に着いた。米軍機が時々襲来したので、隊列を作らずに、グルーブごとに行進したり隠れたりしたので、三日もかかつてしまつた。嘉手納で身体検査が行なわれた結果、本部出身者のうち五〇人が不合格であった。当時、飛行場はまだ整備中であったが、私たちには、部落から石を集めてトラックに積み込む作業に従事することとなつた。

三月一日には首里へ移動して、地ならしをしただけの飛行場の整備に参加させられたが、すでに昼間は空襲のために作業が出来なかつたので、殆んど夜間作業であった。しかしそこでは、食事だけ一人前に食べてろくに仕事も出来ないと思われたのであるが、私たちは再び嘉手納へ帰されてしまった。

当時、嘉手納の比謝橋の付近には、友軍の食糧が山のようにならなかつたが、私たちには、それを美里へ輸送せねばならなかつた。夜間は輸送を急ぎ、夜が明けると部落の屋敷から木の枝を折

ワブキやヨモギを摘んで来て食べたり、海の藻をオイルでいためて食べたりしていた。

その頃、いつも歩いていた海岸の近くに、めずらしくも薩摩芋の畑があつたが、ある晩のこと、私は友人たちとしめし合わせて、そこからかずらを盛んで来て食べたことがあった。いうまでもなく、当時はかずらなどはどこを探してもなかつたし、それが一番のご馳走だったからである。

米兵の吸殼を集めて

村に帰つて来てから、私も悪性のマラリアに苦しめられた。医者も薬もなかつたので、年寄たちに体中から採血されたものである。だが、間もなく、マラリアが治ると私は、當時謝花にあつた米軍の航空隊に勤めるようになつた。そこで、掃除や、炊事の手伝いをしていたのであるが、しばしば肉や卵や果物などを持つて帰ることができたので、私は、他の人々よりはだいぶ生活は楽であった。

だが、家は茅葺きのままだつたし、壁も厚紙で簡単に囲つてあるだけであったので、私は、部隊からトタンを狙いで来て修繕したことであった。

また、当時は煙草も殆どなかつたので、私の兄など、非常に困っていた。それを知っていたので私は、米兵たちがムービー・ハウスに捨てた吹殼を袋に集めて、兄のために持つて帰るようになった。部隊では一日おきに映画が上映されていたが、私は、映画のあった翌日、早目に出掛け行って、炊事などを済ませると、吹殼を拾うのが日課のようになつていた。それを持って帰ると、私の兄は、子

里にも三日ぐらいいたけれども、食事の分だけしか仕事が出来なかつたものだから、君らは真部山に帰れということで、向うからまた本部の真部山に帰された。私たちを召集したのは、真部山の宇土部隊だったのである。

その時、米軍はすでに上陸していて、名護などに駐屯していたので、私たちは昼間は山の中に隠れ、夜になると山道を歩きつづけて帰つて来たのであつた。

私は召集を受ける前に大堂に避難に適当な場所を見つけておいていたが、私が中部に行つている間に父と家内が壕を掘つて、どうにか住めるようになつっていたので、私たちの家族はそこへ避難することになつたのである。

家族は、家内と父と三人の子供で六名であった。大堂から備瀬に食糧を取りに来たことはたびたびあつたし、山川付近の海岸の岩穴

に身を潜めていたこともあった。ある日、私たちの隠れている岩穴

の隣から、四人の男たちが米軍にひっぱられて行つた。海岸一帯を掃蕩していた米軍の網にひっかかったのである。彼らは彼らと岩を一枚隔てているだけであつたが、さいわいにも見つけられずに済んだ。男たちは、そこから新里まで連行されたが、その日のうちに射殺されてしまった。いずれも四〇代のまだ働きざかりの男たちであつた。そのほかにも、畑からひっぱられて行つて殺された者もいるし、北側の海岸付近で射殺された者もいた。次に出てくる満名カメさんの御主人の両親も、屋中は私たちと一緒に隠れていたが、すっかり暗くならないうちに出て行つたために、殺されてしまったのであった。

米兵の残虐行為

本部町備瀬 満名カメ(二十四歳)

米軍を警戒しつつ

私は、主人が中支に行つていたので、三歳の長女をかかえて実家にいたが、そのため戦争中は実家の家族と行動を共にすることになつた。米軍が上陸する直前に備瀬の人々は殆んど大堂に避難したが、私も子供をおんぶし、夜の明けるまで重い荷物を頭に乗せて三回も運んだ。

大堂では、子供が泣き出すとアメリカに見つかるから危険だといつて、とてもいやがられた。それで私は、娘を連れて山のずっとて来ようとはしなかつた。それから三日間、私たちは毎日ミシャー川まで出掛けたが、彼はまだそこで魚を釣つていた。やがて、作業に出ると配給があり、トウモロコシを碎いたものをもらつて来て、米に混ぜて食べるようになり、いくらか暮らしよくなつた。とはいえ、食糧が足りなかつたばかりに、金網の中へ盗みに入ろうとして、米兵に射殺されたものもいた。また、はるばる本部まで食糧を取りに帰る途中、米兵に襲われた婦人たちの話はたびたび耳にしたし、働き手のない家族では、一二、三歳の少年を本部まで大人たちについて行かせたものの、途中で敗残兵に荷物を全部奪われて、何も持たずに戻つて来る例もあつた。

乳呑児をかかえて

本部町備瀬 宮里美枝(二十三歳)

父の死

米軍が上陸して来た時、私たちは実家の家族と一緒に大堂に避難していた。私は乳呑児をかかえていたので、その子が突然泣き出したりすると、みんなと一緒にいることが本当に辛かつた。

大堂で米軍に捕まり、そこから親泊に集結し、それから久志へひっぱられて行つた。久志に着いてテント小屋に入れられたが、土の上にじかに寝るわけにはいかなかつたので、草を刈り集めて敷き、その上で暮らすことになつた。食糧は配給米で雑炊を作つて食べたこともあつたが、もちろんそれだけでは足りず、海の藻を食べ

上に登り、一緒に泣いて過ごしたものもあつた。

上陸して来た米軍は、壕に隠れていた男たちを追い出し、煙草を与えておきながら背後から射殺した。また国民学校の生徒がいたる穴から跳び出し、アメリカを見て驚いて穴に戻るうとしたところを殺された例もある。

ところで、米軍上陸後も、大堂から備瀬や食糧などを運びに来る人々が多かつた。そんなある日、主人の両親も鍋や釜を取りに出掛けたところを米兵に捕まり、射殺されてしまった。夜が明けても戻つて来ないので、みんなで手分けして探しに出掛けたが、新里の畑に埋めて棒を立ててあったとのことであった。

またその頃は、強姦事件も起つていて、実際に泣き寝入りさせられている者もいたので、村に戻つても、若い子持ちの女性などは天井裏に隠し、食べものも下から上げるほどの警戒ぶりであった。

久志の収容所にて

私たちは間もなく捕まつて久志へ連れて行かれたが、そこではまず、米軍の船から陸揚げされた荷物を運ぶ作業に狩り出された。また、食べものがどうしても不足だつたので、米兵に襲われるなどを警戒しながらも、山奥まで行つてヨモギなどを摘んで来るのがつねであった。ヨモギを摘みにミシャー川に行つた時、そこに女性の眼を着た敗残兵が一人でボツンと魚を釣つていた。そこで私たちはその敗残兵に対し、「私たちと一緒に行つたらアメリカたちは殺しはしないはずだから行こう」と誘つたけれど、黙つたままでついに結婚できずに家にいる)。

備瀬に帰つて来てからも、しばらくは全部一緒にガジマンというマラリアにも一回ずつ罹つたが、さらに運の悪いことには、弟たちが二人とも脳膜炎に罹つてしまつた(そのため下の弟はいまだに結婚できずに家にいる)。

たり、山奥まで行つてヨモギなどを摘んで来て食べたりしていた。広っぽに掘立小屋を作つて住んでいたが、間もなく各自の住居を建て、耕作を始めるようになつた。そして、わずかばかりの配給に芋の葉を摘んで入れ、蘇鉄をまぜて、雑炊にして食べたのであつた。

なにしろ芋もなかつたのでウムニー(皮をむいた芋をふかしてこねたもの)さえも、なかなか食べることができなかつた。

私の主人は通信隊だったが、浦添から首里の工業学校の付近に配つたさいに、艦砲でやられて死んだとのことであつた。戦後、夫の死がはつきりしたので、私は再婚した。

本部町備瀬 玉城誠市(十三歳)

て、私たちは備瀬に戻って来た。伊豆味も猛烈な艦砲射撃を浴びていたし、どうせ死ぬなら生まれ育った備瀬にいたほうがいいと、思われたからである。

ところが、備瀬に帰つて間もなく、私の父は、あたりが静かだから大丈夫だろうと、壕から抜け出して、畑で空豆を取つているところを、米軍に見つかって、撃ち殺されてしまった。

それから数日たつて、鉄血勤皇隊に加わっていた兄が無事に戻つて来たので、私たちの家族は、さらに一ヶ月ぐらい、海岸の壕に隠れていたが、やがて、付近の人々が次々へ移動を始めたので、私たちもそこへ集結することとなつた。そこで私たちは捕虜となり、久志へ連れて行かれたのであつたが、その途中の名護から許田に至るまで、大きな荷物を担いだり頭に乗せたりしながら、人々の波がいつ果てるともなく続いていた。

金網の中のC.P.たち

久志では、間もなくひどい食糧難に陥り、殆んどの人々が栄養失調とマラリアで苦しめられだし、また遠く本部まで、食糧を取りに帰らなくてはならなかつた。約三五キロの遠い山道を、私のような少年たちも、大人たちについて通つたものである。

ところが、せつかく久志まで担いで来ても、例のC.P.が待ち構えていて、荷物を全部かっぽらわれることもあつた。私も二回奪われてしまつた。だがある日、そのC.P.どもが、どういう理由でそうなつたかは知らないが、逆に金網の中に放り込まれていて、それを少年たちがさんざんからかっている光景に出合せたことがあつた。職

に行けなかつた。

ある時、大浦から備瀬まで大人たちについて食糧を取りに帰つて、名護の為で黒人兵が尿を捨てて帰るのにぶつかつてしまつた。彼等がトラックを止めて、一人の婦人を連れ去ろうとしたので、一緒に来た者がみんなその婦人を助けるために、泣き叫んだりすがりついたりしたので、ついに黒人たちもあきらめて立ち去つたことがあつた。

大浦から備瀬に帰つて来てからも食糧難で苦しんだが、一番辛かつたのは、渡久地まで配給を取りに行くことであつた。私は両親とも病弱だったので、罐詰や米などの重い荷物を頭に乗せて来なくてはならなかつた。

その日の空襲で、渡久地はすっかり焼野原と化してしまつたし、具志堅でも殆んどの家が焼けてしまつた。また、産業組合の重要書類も、ことごとく燃えてしまつたので、苦情を持ち込まれてもどうすることもできなかつた。貯金を引出したいからと申し出て來ても通帳のある人々はともかく、家が焼けて通帳をなくしてしまつた人々に対しても、まことに氣の毒であったが、どうしようもなかつた。

供出に明け暮れて

はならなかつたが、あまりの重さに首筋が折れはせぬかと思われることもあつた。だから、荷物が軽い時は理屈ぬきに喜んだものである。

往々往するばかりで、殆んどなす術を知らないありさまであつた。その日の空襲で、渡久地はすっかり焼野原と化してしまつたし、具志堅でも殆んどの家が焼けてしまつた。また、産業組合の重要書類も、ことごとく燃えてしまつたので、苦情を持ち込まれてもどうすることもできなかつた。貯金を引出したいからと申し出て來ても通帳のある人々はともかく、家が焼けて通帳をなくしてしまつた人々に対しては、まことに氣の毒であったが、どうしようもなかつた。監督がいる間は作業をしているふりをして、いなくなるとつとめてサボつたものだつた。

このような徴用を四回もやらされたが、間もなく、村の先輩たちから、徴用で苦しむよりは区長にでもなつたらどうかと勧められたので、渡りに船だということであつたりそれを引き受けた。

戦時中、私は本部町の産業組合長をつとめていた。それ以前は、瀬底・崎本部・伊豆味・渡久地・具志堅の五が字に産業組合があつたが、合併せよという県の命令を受けて、合併後の初代組合長に推されたのであつた。

ところが、戦争が切迫して来るとい、組合は、本来の機能を停止して、軍向け物資の集荷に明け暮れるようになつてしまつた。伊江島に送る芋や野菜を、各戸毎に割当て、それを組合に集めて、送り出したかと思うと、すぐまた次の供出命令が来る、そのような毎日であつた。十・十空襲以後は、お茶も供出せよという命令が来たので、私は、友人と二人で自転車を駆つて久志まで行き、やつとそれを仕入れて來たこともあつた。

また、十・十空襲の日は、古島の上空から米軍機が四機編隊で襲来し、ところかまわず爆弾を投下しながら、健撃方面へ飛び去つて行くのを見た。

私は、大急ぎで産業組合まで行つたが、すでに付近一帯は火の海と化して、まったく手がつけようもなかつた。兵隊たちも、ただ右

権を濫用して、同胞から食糧を奪つて恥じない「道端巡査」にに対する、少年たちのささやかな報いであつた。

苦しかつたあの頃

本部町備瀬 備瀬節子（十四歳）